研　究　紀　要

第 7 号

1990

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目　次

デポの意義 ……栗島　義明(1)
—縄文時代草創期の石器交換をめぐる遺跡連鎖—

立野式土器についての一考察 ……中島　宏(45)

東国における後期古墳……山本　禎(67)
—凝灰岩を石室構築材とした横穴式石室—

中田以前の土師器研究……大屋　道則(93)
—編年研究の原則と分類方法の変遷—

瓦塔瞥見 ……高崎　光司(209)

古代～中近世の井戸跡について(1) ……鈴木　孝之(217)
—埼玉県における形態分類を中心として—

北武蔵における古瓦の基礎的研究IV ……昼間孝志・宮　昌之(273)
木戸春夫・高崎光司
赤熊浩一

デポの意義

—縄文時代草創期の石器交換をめぐる遺跡連鎖—

栗　島　義　明

1　はじめに

縄文時代の草創期には、デポと呼称される極めて特異な遺物の出土状態が知られている。古くは福井県の鳴鹿山鹿遺跡[1]、秋田県綴子遺跡[2]、長野県神子柴遺跡[3]で、近年では埼玉県大宮バイパスNo.5遺跡[4]や福島県仙台内前遺跡[5]、大分県市ノ久保遺跡[6]などで、それぞれデポとして認定されるような遺物の出土状態が報告されている。

これらデポに関しては、遺物の集中的な出土状態や完形品の高依存率、石器形態の斎一性などから埋納説[7]、副葬品説[8]、住居説等[9]の多様な評価、解釈がなされてきたが、未だにその評価に関しては研究者間にあっても統一されたとは言い難い現状にある。そうした研究経緯を鑑みる時、当然のことながらデポとして識別された遺跡、及びそこから出土した遺物双方の資料的希少性がそうした要因の一つとして数えられようが、問題はむしろデポ自体の認識と解釈にこそ存在していると考えられるのである。従来、デポとして紹介された遺跡や遺物を管見する限りに於いても、それぞれには出土状態や遺物構成などの点で明らかな相違が認められるように感じられる。それらを〝デポ〟[10]という名称の基に一括するのは果たしてどうであろうか？　加えて、デポとしてそれらを特殊視する一方、何故特殊であるのか、一般的な該期の遺跡、遺物との比較検討が十分に行われたとは言い難い現状にある。一歩譲ってみても、そうした特殊な遺跡、遺物と普遍的なそれとを弁別するだけではなく、特殊の特殊たる所以をそれ自体の分析を経て明確にすると同時に、そうした特殊性を生み出す要因を普遍性との対比を通じて探る必要があろう。

著者はデポの研究というものが、デポと認識された遺跡や遺物のミクロな分析に拠ってのみではなく、一般的な該期の遺跡、遺物との比較研究によってこそ明らかになって行くものと確信するのである。更にそうした言わば特殊視される遺跡を形成する要因を社会・経済的な側面から考察する必要も強く感じている[11]。本論の目的とするところは、まさにこうした特殊な遺構とされるデポとその構成遺物を題材に、一般的な遺跡との比較研究を通じてその特質と範疇を明確にすると同時に、そうした両者の弁別を経て相互の有機的関連性を探りそれを糸口として該期、神子柴文化期の社会的な特質について言及することにある。

2　所謂〝デポ〟資料の検討

岡本東三氏は1979年の論文[12]で神子柴文化期のデポとして6遺跡(秋田県綴子遺跡、岩手県持川遺跡、長野県横倉遺跡、長野県宮ノ入遺跡、長野県神子柴遺跡、福井県鳴鹿山鹿遺跡)をあげ、同時に長野県の唐沢B遺跡[13]についても「生活跡とは断定しえない」と、デポとして肯定的に捉えている。一方、著者は1988年に神子柴文化期の資料を集成した際[14]、デポとして岡本氏の集成に北海道陸

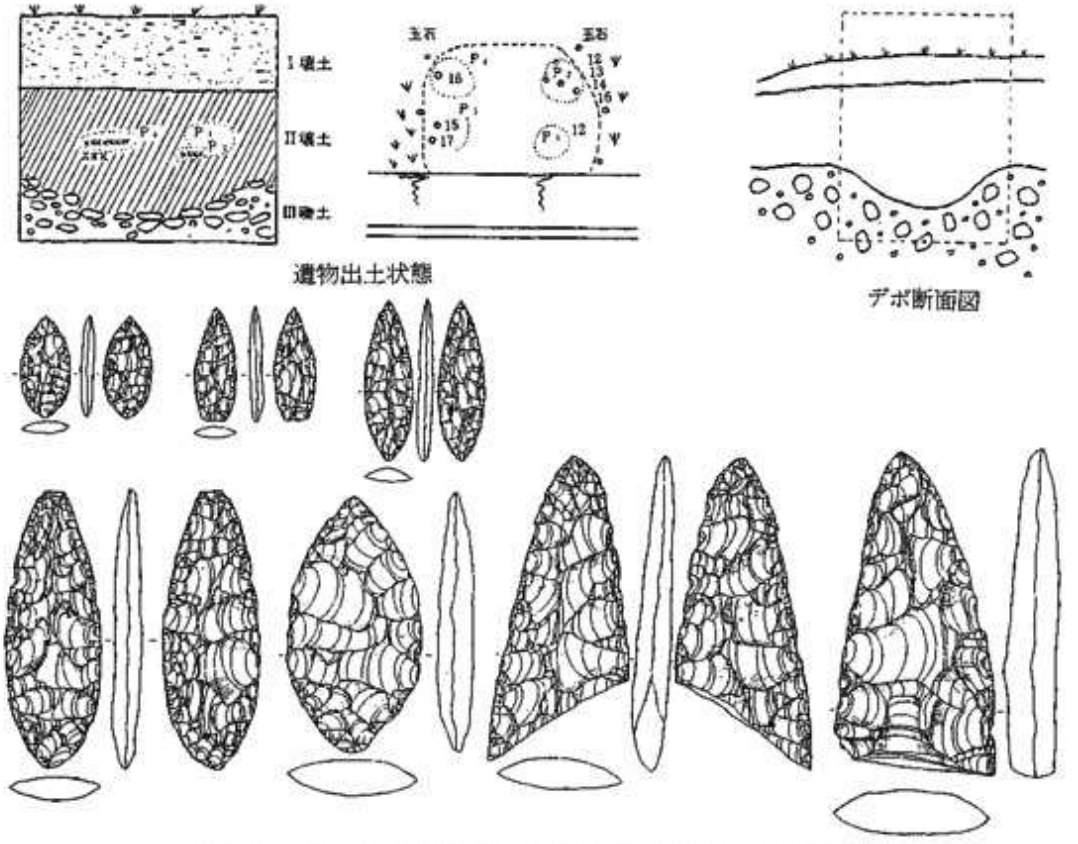
別遺跡、埼玉県大宮バイパスNo.4遺跡を加え、神子柴遺跡や唐沢B遺跡を除外した。それ以降、デポとして福島県仙台内前遺跡や大分県市ノ久保遺跡などが紹介されているが、前者は石器製作跡としての色彩がむしろ強く、後者は概報のみでその詳細に関しては十分に知り得ないが石斧が隣接して出土したという以外にデポとしての根拠がないように思われる。両遺跡共に遺跡自体の特徴としてではなく、遺跡内に於ける部分的な遺物集中（遺物の隣接出土）をもってデポと認識しているに過ぎない。こうした遺跡、遺物については後に検討するが、ここでは上記したその性格からもとりあえず通常のデポとは切り放して考えておくこととしたい。一方、その後、長野県の駒ヶ根市小鍛治原から7点の石槍と1点の刃器が採集されていることを知った。後述するように本例は遺物のみならずその出土状況からもデポとして認識されるものである。

ここで取り上げた8遺跡は、単一の或は特定器種を主体に、極めて狭い範囲から集中または折り重なった状態で石器遺物の検出されることを第一の特徴とし、石器製作の痕跡や他の器種を殆ど組成していない点も考慮すべきであろう。また、大半が完形品によって占められている点も同様に看過できない。こうした現象的な面に於いてもデポの一定の特質は捉え得るところであり、この限りでも神子柴遺跡や唐沢B遺跡をここから除外したことが理解できるであろう。以下、ここにあげた遺跡と出土遺物を検討し、デポと認識されたものがどのような遺物によって構成されたどんな遺構であるのか明らかにし、その後にデポの一般的特質の認識深化を行っておきたい。

＜北海道陸別遺跡＞[15]

遺跡は十勝平野の北、足寄郡陸別町に存在し、峠を隔てて黒曜石原産地として名高い置戸安住町が存在する。発見の経緯は、パワーショベルに拠る町道工事中に大形の黒曜石製の石槍が検出されたことを端緒とし、その直後の調査によって石槍を主体とした遺物が集中的に出土した。遺物の内訳は大形の石槍10点（完形品8点）、中形石槍4点（完形品2点）、石刃6点、掻器1点の合計21点であり、中形の一群が頁岩を素材としている他は総て黒曜石を用いている。これらの遺物は、調査の結果約2.5m四方の範囲からまとまって出土することが判明し、興味深いことに「遺物出土地点のローム層は巾約1m50cmにわたって深さ70cm～1mほど落ち込んで礫層に及んで」いるピットが確認された。恐らくデポに伴うこのような遺構が検出されたのは全国的にも初めての例であろう。

さて、この陸別遺跡の重要な点は、遺物が遺構に伴って検出されたことと共に遺物そのものにある。大形石槍のなかには半欠損品ながら長さが30cmを越すものが2点存在する。完形ならば恐らく50cmをはるかにを越える大きさを有するものであっただろう。完形の大形石槍とされたものも長さが25cm、幅が13cmを上回り、これさえも当該地域に類例の見いだし難い程の大形品である。また、大形品を中心に認められた欠損品と紹介されているものは、そのいずれもが器面の表裏に荒い調整加工が施されたもので側辺は部分的に直線を呈するものの、大部分は著しい湾曲を示している。更に石槍欠損品とされたその先端部分は、両側辺からの調整によって作出されたものではなく、折断面や大きな剝離面と部分的に調整加工の施された側辺とが交差して尖鋭な形態を作出しているのである。これらの石槍はいずれも器体中央部より「横位に破折している」ことが注目されているが、先端部を作り出していない石槍が石器として機能していたとは考え難く、先に述べたように荒い器面調整も併せて考慮するとむしろ石槍の未製品として理解するほうが妥当であろう。



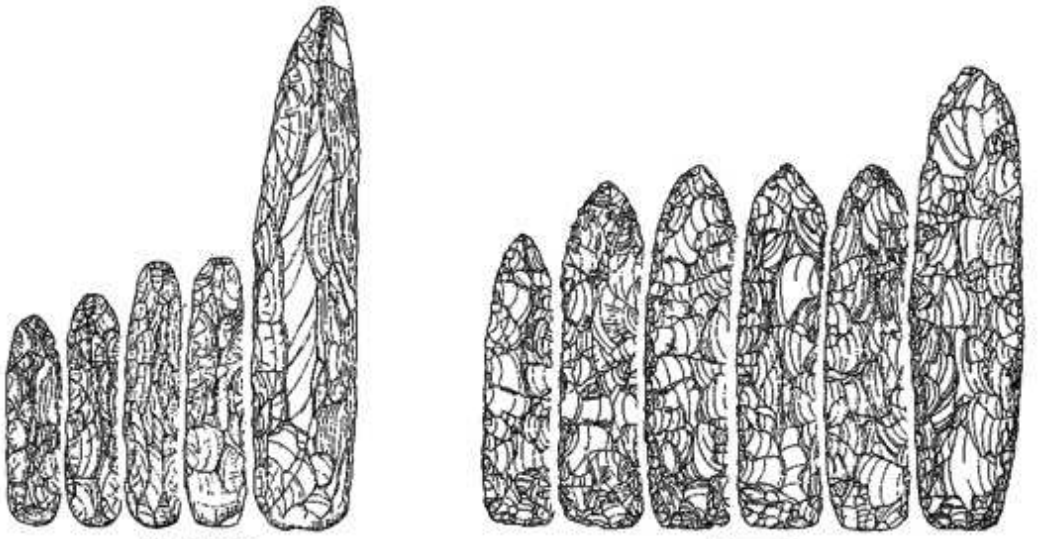
第１図　陸別遺跡（石器は報告書中のものを再トレースした：1/5）

陸別遺跡では、これらの石槍を中心とした遺物が礫層まで掘り込んだピット状遺構から検出された点で特に重要であろう。また、石槍のなかには完形品と共に未製品も存在し、異系統石材である頁岩を用いた石槍が組成することも看過できない。分布図を見ると遺物群は2.5m四方のピットのなかからランダムに検出されたのではなく、数点がまとまった状態で何箇所かの集中を形成していることが判別される。しかも断面図に示された各集中での遺物分布は互いに水平方向に点在し、各々が一部折り重なったような状態で出土したことを窺わせている。

＜秋田県綴子遺跡＞[16)]

綴子遺跡では７点の石槍が出土している。石器は秋田県旧綴子村大畑在住の小笠原氏が自宅裏に溜め池を築造中に一ヶ所から集中して出土したものを、1919年に長谷部言人氏に寄贈したものであるという。写真を見るといずれの石槍も頁岩製で、その長さは15～20cm、幅は６cm前後にまとまりを見せる大形品で、比較的斎一性の強い一群であることが理解される。また、形態的に見た場合にも大形、幅広の特徴は共通した要素であり、しかもやや丸みを持った先端部と基部とは写真に掲載された石槍の総てに共通して見い出される特徴と言える。

綴子遺跡の石槍７点はこのようにその大きさや形態に於いて極めて強い類似性、と言うよりは斎一性が窺われ、出土状態については不明といわざるを得ないが、剥片の類いを含まなかったことは確かであろう。そしてこれら石槍が溜め池の築造中ながらも「まとまって発見された」、「１ヶ所か



第2図　宮ノ入遺跡・持川遺跡（1/4）

ら集中して出土した」と紹介されていることは、7点の石槍が平面的或は垂直的に接したかたちで検出されたであろうことを示唆していると言えよう。

＜岩手県持川遺跡＞[17]

持川遺跡は和賀郡江釣子町に存在している。報告者の鈴木氏に拠れば「水田の改良工事中に珪質頁岩製の大形打製石斧が若干の剝片を伴って、積み重なる状態で1ヶ所から発見された」という。石斧は7点発見されたと記載されているが、現存するのは6点である。この6点の打製石斧は、頁岩製で三角形状に尖った基部と直線的な刃部を持ち、その側辺は直線的で身部の横断面状は三角形でなくレンズ状であり、該期石斧のなかでも例外的に薄い。刃部の研磨は行われていない。ここに掲げた特徴は出土した打製石斧に例外なく当て嵌まるものであり、この点に関しては鈴木氏が「非常に斎一性をもっている」と紹介されたとおりであろう。

持川遺跡の打製石斧は、その石質ばかりでなく石斧自体の基部、刃部、そして側辺部等の形態的属性に於いても強い斎一性を持っている。こうした個々の石斧個体を越えた相互の共通性は、だがこの遺跡を離れると極めて例外的な特徴となってしまい、型式的類似というよりは石器を製作した何等かの単位を表象しているものとも考えられよう。持川遺跡から発見された打製石斧群に欠損品は無く、また部分的な欠損も認めることが出来ない。恐らく使用以前の石斧（未成品）を集積していたからであろう。そして、こうした遺物が積み重なって出土する背景には、当然のことながら陸別遺跡と同様、何等かの遺構の存在を予想させるのである。

＜埼玉県大宮バイパスNo.4遺跡＞[18]

大宮バイパスNo.4遺跡からは6点の石槍と1点の石槍未製品、1点の削器が1.5m四方の非常に狭い範囲から出土している。やはり剝片や砕片の類いは全く認められていない。石槍は9cm前後の中形品と6cm前後の小形品とに区分できるが、いずれの石器も器面調整のみならず周辺調整も粗く、

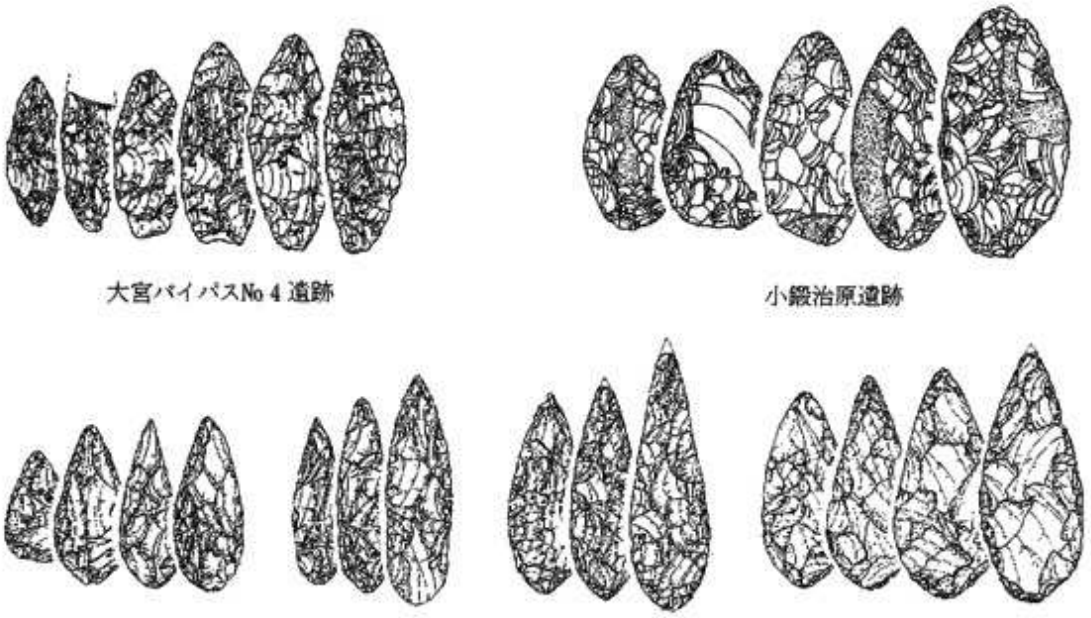
未成品の可能性が極めてたかい。既に報告者の田代氏は粗雑で大型の剝離、石器横断面がレンズ状でなく逆三角形状を呈し、石槍先端部が鋭利でないことに注意を示されている。こうした諸点に加えて、これらの石槍群で看過できないのは小形の１例を除き、いずれの石槍にも素材である黒曜石角礫の自然面を残存している点にある。

そうした自然面が一面のみならず石器表裏にわたって観察される例や、石器の基部や先端部に残されている例も認められるのである。その典型はスクレイパーとして分類された楕円形の石槍未成品であり、石器の表面と側面に自然面を、更に両面が交差する角礫の稜部分までも残存させた資料で、角礫の長軸に沿って大形の縦長剝片を剝離し、それを素材として周辺に部分的な調整加工を施したものである。石器の基部側には素材剝離時の打面を大きく残し直線的な側辺を形成し、先端部には表裏のそれぞれ一側辺の側から粗い調整を施すことにより、やや丸みを持った先端部を作出している。調整加工の精粗差は見られるものの、ここに認められた諸点は基本的には他の石槍にも共通した要素であり、これら大宮バイパスNo.４遺跡の石槍群が未成品として遺跡に持ち込まれたことを示している。本遺跡の石槍群は、その石器表裏面に自然面を残存させた未成品状態である点、注意されるべきであろう。加えて素材となった黒曜石角礫は分析の結果、栃木県の高原山産であることが判明している。遺跡との直線的な距離は約120kmであり、未成品の石槍が遠距離から齎されたことが具体的に明らかにされた。石槍群資料を詳細に観察すると、その剝離面どうしが切り合う稜部分は摩耗が著しく、一部では擦りガラス状になってさえおり、それは石器表面のみならず側辺にまで及んでいる。恐らくは石器運搬時で皮袋等に入れられた石槍が互いに触れ合った結果に形成されたものと考えられる。

＜長野県横倉遺跡＞[19]

横倉遺跡からは、採集品とその後の発掘品を含めて40点の石槍が発見されている。石槍の出土地点は小段丘上の20m²未満の極めて限られた範囲にあり、石槍の他には１点の石槍素材と考えられる横長剝片と若干の砕片が認められるに過ぎない。石槍群は遺跡背後に位置する千曲川左岸の関田山地に広く分布する安山岩を用いており、他の石材に拠って製作された石槍は１点も存在しない。

石槍群は大略15cm前後の大形品と12cm前後の中形品とに区分でき、それ以下の大きさのものは単体で見られる程度である。石槍はいずれもその表裏に調整加工が施されているが、調整が粗なものには素材剝片の剝離面を残存させているものがあり、それ等は殆ど例外なく横長の剝片を素材として用いている。この横倉遺跡の石槍に関しては「大形の両面調整で最大幅が基部近くにあり、円基状の基部をしたもの」として型式的に把握され、「横倉型」の名称が冠されている[20]。この指摘は横倉遺跡の石槍の特徴を適確に言い当ててはいるが、ここで注意を喚起しておきたい点は、次の諸点に関してである。即ち、横倉遺跡の石槍は粗い器体調整の後、全周を巡ることのない部分的な周辺部への調整によってその形態が作出されていることである。つまり、器体面の整形と側辺部の修正を行う石槍製作工程が欠落している可能性がたかい。この為に器面には粗い調整痕が認められ、側辺部分の整形部位はあたかもナイフ形石器に於けるプランティングと同様な印象を与えているのである。こうした石槍製作工程の部分的欠落を、換言するならば横倉遺跡出土の石槍の未成品としての可能性をより顕著に示しているのがその基部と先端部である。横倉遺跡の石槍は、石槍として最



第3図　大宮バイパスNo 4 遺跡・小鍛治原遺跡・横倉遺跡

も重要な基部と先端部に関して整形が極めて不完全なものであり、特に先端部に至っては器面整形時点の剥離を残存しているものも散見されるのである。

横倉の石槍は、素材が大宮バイパス例のように角礫ではなく横長剥片の為に自然面等を残していないが、主要剥離面や整形時の剥離面を残存させている点、そこに大きな相違を認めることは困難であろう。恐らく石槍未成品として理解するのが妥当であろう。調整加工が一部両面に及び石斧としての可能性も指摘された大形の横長剥片も、これらの石槍と同様に石槍未成品として扱うべきである。そして、剥片や砕片の類いの伴出が遺跡内に認められないことは、これらの石槍は他の場所で製作され、何等かの目的の基に未成品のかたちでここ横倉遺跡に搬入して残されたものであったのだろうと考えられる。

<長野県宮ノ入遺跡>[21]

宮ノ入遺跡は長野市大室に所在し、著名な大室古墳群に近接した位置にある。遺物は植林作業時の際に掘ったピットから出土したもので、5点の刃部を研磨した打製石斧が発見されている。植林の為の穴は通常30cm前後ということであるから、いかに小範囲からこれらの石斧が発見されたものであるかが理解できよう。そして本資料も持川遺跡例などと同様に、石斧どうしが積み重ねられていた可能性が極めてたかい。

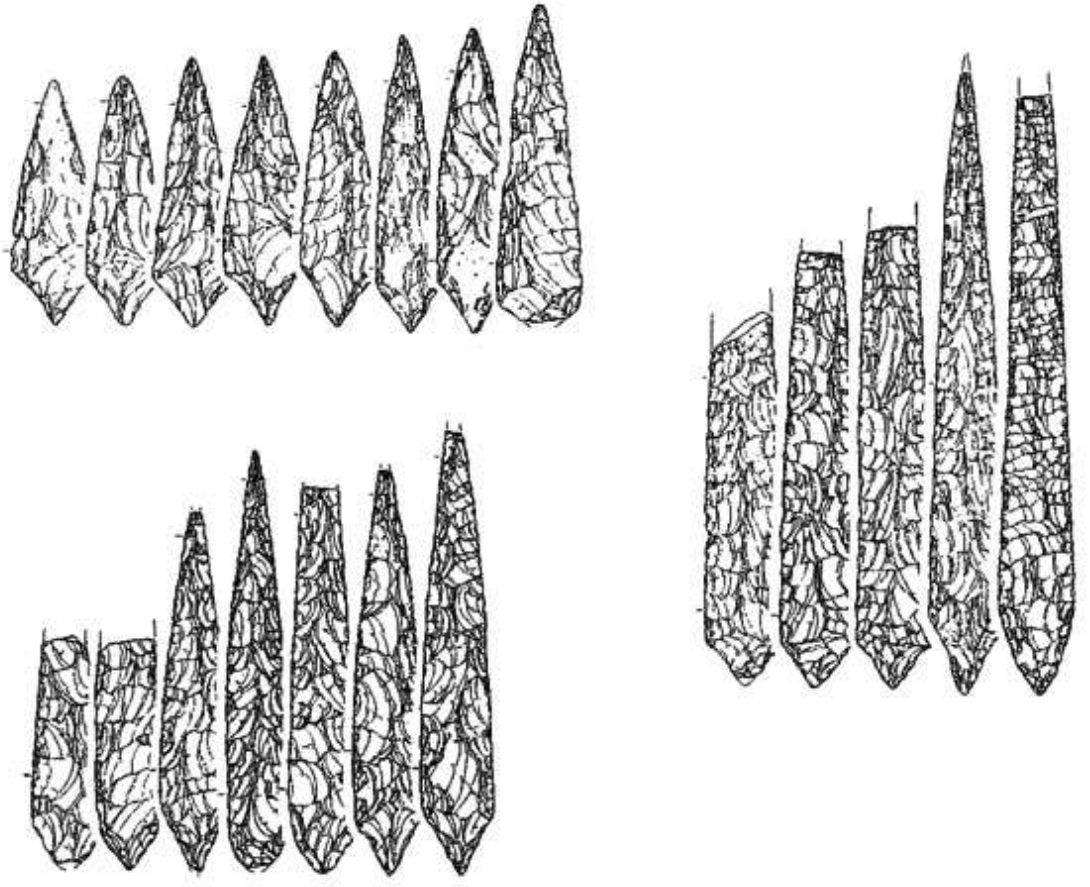
石斧は全部で5点発見されているが、これらの総てが同様な形態を呈するのではなく内1点がやや突出した在り方を示している。即ち、4点の石斧はその長さが15～20cmの範囲に収まるのに対して、1点は長さが32.1cm、幅が6.4cmと他よりも二廻り程も大きい石斧である。この宮ノ入遺跡の石斧に於ける二者は、単に大きさの違いではなく、製作技術や形態等の点に於いても差異を際立たせている。つまり、大形の石斧は横断面が台形状を呈し、直線的な両側辺は石器の上半部付近から湾曲して基部で交差している。この為に石斧の基部は結果的に二等辺三角形状に近い尖鋭な形態を呈

している。これに対して小形の石斧の横断面はレンズ状か蒲鉾状を呈しており、その側辺は直線的で弧状の基部へと連続し長楕円形の平面形態を形成している。また、一方でこうした差異と共に両者は、同一の頁岩を素材として刃部部分には僅かながら研磨が施され丸い弧状の刃部が形成される共通性も看取される。宮ノ入遺跡には、石斧集積の中に二つに分離できる性格の石器が一括してされているのを認識しておく必要があろう。

＜長野県小鍛治原遺跡＞[22]

小鍛治原遺跡では、表面採集資料ながら発掘資料と同様に良好な状態で石槍群が発見されている。遺跡は天竜川の右岸段丘上に立地し、神子柴遺跡よりも15kmほど下流の駒ヶ根市に所在する。発見された遺物は７点の石槍と１点の石刃であるが、石槍については次に述べるように興味ある出土状態が確認されている。即ち、桑を植える際に掘り起こされ「盛り土の中に在り、わずかにその一部が露出していた」石槍群の「中には同じ土塊中に重なる様にして存在」したものがあったという。

発見された７点の石槍はすべて黒曜石を石材として用いたもので、いずれの資料も自然面を大きく残存させている。特に２例の石槍についてはその表裏にわたって自然面が観察され、本石槍群が黒曜石角礫を母材に用いて製作されていることを明示している。石槍群は長さが12cm前後の中形品と９cm前後の小形品に区分できるが、その幅についてはほぼ６cmという均一的な数値を示している。



第４図　鳴鹿山鹿遺跡

石器器面に残存する剝離面を観察すると、自然面を除去した第一時の剝離面が大きく残り、そのなかには側辺部側から器体中央部をはるかに越えたものも認められる。恐らくこの種の剝離は素材となった角礫の稜及び自然面の除去を目的としたものであったのであろう。この後、角礫の周辺部には調整加工が施され石槍としての形態が形成されているが、この種の調整加工は全周辺に巡らされることがなく極めて部分的なものである為に、石槍としての基部及び先端部の作出は未だになされていない。石器の基部、先端部付近に自然面の残存していることは、こうした見解を指示している。改めて言うまでもなく、このような特徴を有した本石槍群は未成品として当地に持ち込まれている可能性がたかい。同じ土塊中から重なるように検出されたことも、未成品としての石器群の性格を別の側面から裏付けているように考えられる。

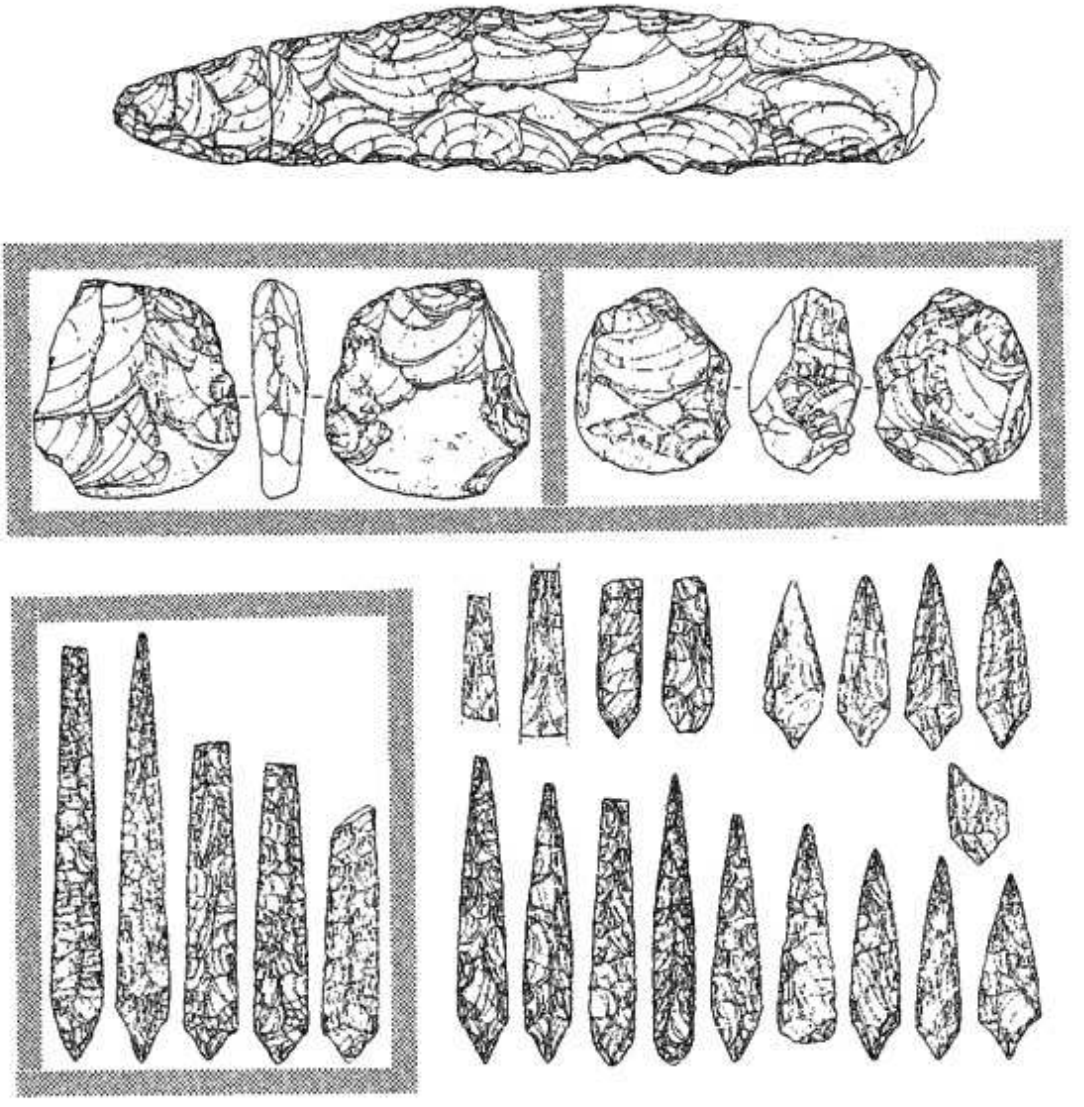
＜福井県鳴鹿山鹿遺跡＞[23]

鳴鹿山鹿遺跡は該期のデポとして著名で、既に多くの著作で紹介されている。その発見の歴史は古く、為にその間に失われてしまった遺物も多い。遺物は九頭龍川の中流右岸の低位段丘上から、1867年（明治元年）の用水工事の際に発見されたもので、その出土状態は２点の石核の上に長大な打製石斧を置き、その下に30点余りの有茎尖頭器を横たえていたものであったと言う。現存する資料は有茎尖頭器23点、石核２点、打製石斧１点で、有茎尖頭器が７点程と石核が１点失われてしまったと考えられる。

さて、鳴鹿山鹿遺跡を代表する石器は言うまでもなく有茎尖頭器であり、特に茎部形状の未発達で長大な身部長を持った一群が典型として紹介され、型式的に把握されてきた学史的経緯がある。この有茎尖頭器をはじめとした鳴鹿山鹿遺跡の石器群に関して近年、松井政信氏が詳細な分析をされている[24]ので、ここではそれを参考にして検討を進めてゆきたい。松井氏は出土した有茎尖頭器を三群に、即ち15cm前後の器長を持つもの、10cm前後の器長を持つもの、７cm前後の器長を持つものに区分され、それぞれをA～C類としている。ここで注意しておきたいのは長大な一群のA類が流紋岩やチャートといった非在地系の石材を用いているのに対して、B類とC類はハリ質安山岩を多用してそこに若干の砂岩・安山岩を含むのに過ぎない点である。いずれにせよB類については若干問題があるものの、C類が在地系の石材に拠って製作されていることは間違いなかろう。また、A類は器体の調整が極めて入念に行われているのに対して、B・C類、特にCは全体的に粗く、素材の主要剝離面や自然面を残存させた資料が半数以上を占めている。加えて、看過できないのは各有茎尖頭器の完形品の占有率を見ると、A類が５点中０点、B類が７点中やはり０点、これに対してC類は９点中７点が完形品によって占められており、このように類別毎の有茎尖頭器依存率に著しい差異の存在する点は大いに興味を引かれるところである。

鳴鹿山鹿遺跡の有茎尖頭器は非在地系の石材で製作された精巧で長大な一群と、在地系石材で製作された精巧で中形の一群、そして在地系の石材で作られた比較的粗雑な一群という、言わば系統を異にする三者が共存している点が重要である。しかも前二者が総て欠損品であるのに対して、後者は大半が完形品であり、使用の頻度差云々は別として或は埋納時に選択的にこれらを一括した可能性も指摘できようか。

これら有茎尖頭器と共に重要なのは、石核と打製石斧であろう。打製石斧はハリ質安山岩を石材



第5図　鳴鹿山鹿遺跡（アミ枠は搬入石器）

として用いたもので、その法量は長さ52.5cm、幅10.5cm、厚さ2.7cmでその全面に粗い調整加工が観察される。石器の表面には自然面が残存することから、その素材は表面に自然面を残した大形の横長剝片であった可能性が高い。周辺調整によって作出された側辺形態は一方が直線的で他方が湾曲しており、その為に全体形状が若干曲がった印象を与えている。こうした平面形態は打製／磨製といった基本的な相違はあるものの、近接した地点で発見された大形(長さ34.0cm、幅5.2cm、厚さ1.7cm)の磨製石斧[25]と同様である。しかも両者は、該期石斧が礫や分割礫を素材として用いるのが一般的であるのに対して大形の横長剝片を素材とし、調整加工も急斜なものではなく平坦なそれであり、何よりも横断面が三角形状でなくレンズ状を呈するという際立った差異を示す。打製石斧については刃部が欠損しており、一方、磨製石斧は全面の研磨に加えて刃部も比較的入念に研磨されていることから実用品としての可能性も存在しようが、上記したような特徴からすればむしろ非実用品と

して捉えておくべきかも知れない。石核は2点共に茶褐色を呈する頁岩製のもので、北陸地域には認められない石質である。その法量は長さ、幅、厚さがそれぞれ11.3cm×10.7cm×2.8cmと9.6cm×8.1cm×4.4cmであって、2点の石核は共にその表裏に自然面を残存させている。両者に残る剥離面から判断すると、全体的に幅広の縦長剥片が剥離されたものと考えられる。ただし、この二つ石核から剥離されたであろう剥片を素材とした石器はここ鳴鹿山鹿遺跡には見当たらず、また、同様に看過できないのはこれらが一定の剥片剥離作業の終了を示す残核とは、到底考えられないことである。その点は先に示した石核法量からも判断されようし、何よりも石核の表裏面に自然面を残していることは偏平礫を素材としていることと考え併せて、そこでの剥片剥離作業の進展が十分でなかったことをも示唆していよう。しかもそれは、当地では入手困難な非在地系の頁岩である。

鳴鹿山鹿遺跡はこうした遺物の特異性と共にそれらの出土状態の特異性も絡んで、その成因については様々な解釈がされて来た。そうした成因面へのアプローチは後述するとして、ここでは次の点について留意しておきたい。つまり、鳴鹿山鹿遺跡の遺物は有茎尖頭器に限ってみても明らかに石材、製作技術等の違った一群がまとめられている事実である。しかもそうした群を単位として依存率に明瞭な相違が存在している。また、それらの有茎尖頭器群を覆って置かれた石斧は在地系石材を用いた長大な製品であり、それを支えた石核は非在地系の頁岩製である。このようにその性格と系統を異にする石器が一緒に、或は組み合せられて埋納されている点に鳴鹿山鹿遺跡の最も顕著な特徴を認めておきたい。

3　デポに於ける遺物構成と集積行為の背景

ここでは次章での神子柴文化期の遺跡構成への分析に先立って、前章に於けるデポでの遺物と遺構について中間的な意味での検討を行っておきたい。恐らくこれまでに紹介してきたデポを該期遺跡と直接的に比較検討することは、その差異ばかりを際立たせることになろうし、また、少なくとも前章での基礎的検討によってデポとして認識されていたものが、その内容面に於ても決して一括されるような内容を持つのではないことが了解されたであろう。

さて、まず注目したいのは先に検討した8つのデポ遺跡では、該期遺跡の認められる石器組成(石斧・石槍・削器・掻器・彫器等）の総てを、或はそれぞれの石器形態が遺跡を単位に偏在しているのではなく、基本的に石槍、石斧という両石器形態のみが限定的に認められる。資料的に希少な現状に於いて断定し切れないものの、いずれにせよデポを構成する資料がほぼこの二石器形態の集積に限られている点は重視しなくてはなるまい。ここで改めてそれらを整理するならば、次のように纏めることができようか。

- 石槍を集積するもの……陸別遺跡（北海道）、綴子遺跡（秋田）、大宮バイパスNo.4遺跡（埼玉）、横倉遺跡（長野）、小鍛治原遺跡（長野）
- 石斧を集積するもの……持川遺跡（岩手）、宮ノ入遺跡（長野）
- 石槍の集積に他の石器が組み合わさったもの……鳴鹿山鹿遺跡（福井）

デポに集積された遺物を単位として弁別した場合、このような三類型に区分することができる。ただし鳴鹿山鹿遺跡についてもその集積の基本は石槍（有茎尖頭器）にあり、石槍を集積したデポ

の一類型として把握できる可能性も否定できない。ともかく、従来デポと呼称されてきた遺構を構成する基本的な石器形態は、石槍と石斧であり前者がその半数以上を占める傾向にあることは現段階に於いて間違いないであろう[26]。また、集積される遺物は石槍・石斧に限定される傾向が指摘されたものの綴子遺跡、宮ノ入遺跡、鳴鹿山鹿遺跡を除けば、いずれの遺跡からも剝片類の伴出が見らることは看過できない。それらは陸別遺跡、持川遺跡、小鍛治原遺跡では石刃であり、大宮バイパスNo.4遺跡では削器、横倉遺跡では石槍素材の横長剝片であった。これら剝片類は石槍、石斧いずれの集積かに拘わらず伴出関係にあるようで今後注意を要しよう。ところで、従来からこれらデポは完成品がまとまって出土することも一つの特徴に数えられてきたが、前章で確認したように陸別遺跡や鳴鹿山鹿遺跡では欠損した資料も認められ、後者にあっては欠損品がより多数を占め、また、欠損後の再利用品も一部確認されている。基本的には、これらデポを更に1)完形品によって構成されたもの、2)欠損品を含むもの、というように二分すべきであろう[27]。そして、前者を2章の検討から導き出されたように未成品として理解されるものであったとしたならば、当然のことながら使用を目的とした前者と使用後の遺物を含む後者とは、同じ集積という行為に拠りながらもその性格、成因を異にしたものと考えられるのである。ただし不思議なことに、現段階ではこの欠損品を含むデポは石槍の集積に限られていることを知る。資料的限定なのかそれとも器種的限定なのか、いずれにしても今後注意しておく必要があろう。

さて、これらのデポから出土した遺物、石槍、石斧という石器形態差を問わずに注目されることは、一括して出土した石器のそれぞれが選択石材や製作技術、平面・断面等の形態的な面に於いて相互に類似した強い斉一性の窺われる点にある。綴子遺跡の石槍、持川遺跡、宮ノ入遺跡の石斧などは相互に極めて斉一性の強い石器群である。また、大宮バイパスNo.4遺跡や小鍛治原遺跡の石槍の一群も最終的な整形が行われていないのにも拘わらずそれぞれに類似性が指摘できようし、横倉遺跡の石槍も40点総てが類似したものではないが、それらの石槍は幾つかの群としてのまとまりを有し、その各々を単位として非常に斉一性の強いことが窺われるのである。同様な視点から判断すると鳴鹿山鹿遺跡の有茎尖頭器群にも、先に弁別した三類を構成するそれぞれは相互に石材、製作技術及びそれに拠ったところの平面形態等の諸点に於いて共通した特徴を持つことが導き出されてこようか。このように見るとデポと認定された集積状態を形成する遺物は同じ石材を用い、同じ製作技術によって、同じ形態に仕上げられた石器と看做すこともできよう。更に考えを及ぼせば、そうした同じ石材を用いる背景には同一空間を生活領域とした集団を、そして同一の技術を用い同じ形態の石器を製作する背景には石器製作者の集団、持川遺跡や綴子遺跡、宮ノ入遺跡の石器のように石器形態がほぼ単一の斉一性を示す場合には特定の石器製作者を示している蓋然性が極めてたかい。所謂デポから発見される一括資料の斉一性生成の背景に、こうした特定の石器製作者の存在を想定しておきたいと思うのである[28]。

このように、デポを構成する石器の斉一性生成の背景に、特定の石器製作者の関与を認め、石器の斉一性を石器製作者の単位次元に還元することが可能としたならば、これまでに検討したデポを新たに単数の斉一性からなる石器遺物の一群と、複数の単位の斉一性を有する一群とに弁別することができるであろう。即ち、前者には綴子遺跡、持川遺跡、宮ノ入遺跡、そして大宮バイパスNo.4

遺跡、小鍛治原遺跡が該当しようし、後者としては横倉遺跡、陸別遺跡、鳴鹿山鹿遺跡が当て嵌まる。そして、それぞれは特定の石器製作者と複数の石器製作者の存在を示唆しているものと考えられるのである。ここで改めて先に指摘した次の二つの特質を併せて考慮する必要があろう。つまり、デポからの石器一括遺物には、在地系の石材を使用したものと明らかに遠距離地に産地を持つ石材に拠って製作された石器、及び完形品のものと欠損品を含むものとに各々区分できる点にある。こうした諸点をまで射程に入れて、言うならばデポを構成する石器遺物の形成面を含めた特質を関係項として構造的に理解するならばどのような再構成が可能にあるであろうか。単一の纏まりから成るデポには大宮バイパスNo.4遺跡、小鍛治原遺跡、宮ノ入遺跡の石器のように明らかに非在地系石材に拠って製作された一群がある。綴子遺跡、持川遺跡では遺跡占拠地付近に使用石材を見いだすことができるか否か不明ではあるが、遠距離地域からの搬入ではない点ははっきりしており前者とは区分することが許されようか。これらはいずれも未成品を含めた完形品を集積したデポであった。一方、斉一性を持った石器が複数単位認められるデポに目を転じてみると、二つの様相に分けて考えざるを得ない。一つは同一石材に拠って製作された石器を多数含む横倉遺跡、もう一つは在地系の石材が主体を占めそこに非在地系の石材を用いて製作された石器を組成した陸別遺跡、鳴鹿山鹿遺跡である。前者が完形品（未成品）によって占められているのに対して、後者は欠損品を含む点注意すべきであろう。両遺跡共に在地系と非在地系を問わず欠損品が見られるが、非在地系の石材に拠った石器の欠損がより目立つ傾向にあるようである。

以上を纏めると次のような仮説が導き出されて来ようか。即ちデポとされた石器集積のなかで十点以下の点数から構成されているものはいずれも石器形態の斉一性が強く、特定の、恐らく個人的な製作に拠った石器の集積を背景としているものと考えられる。そして、大宮バイパスNo.4遺跡や小鍛治原遺跡の石槍資料のように角礫の自然面を残存することは、それら石器の製作がデポ遺跡周辺ではなく石材原産地で行われていたことを明示している。更に、一括出土する石器群が斉一性の強いことを考え併せると、原産地での石器製作が特定の個人によって短期間に、しかもその製作が連続的に行われたことを窺わせてもいる。石器群の斉一性形成の背景にはこうした要因が潜在しているのであろう。では原産地での石器製作は個人の単位で遂行される零細で偶発的なものであったのだろうか。ここで横倉遺跡の石器群が重要な意味を持ってくる。横倉遺跡は綴子遺跡、大宮バイパスNo.4遺跡、小鍛治原遺跡などと比較すると5～6倍相当の数量の石槍出土が認められていたが、その石槍群を形態的に区分すると少なくとも四類別が可能で、そうした類別内での石槍相互の斉一性は綴子遺跡以下の石槍群と同様であることが確認できる。それらの遺跡（遺物）のいわば集合的様相が横倉遺跡に於いては看取されるのである。先に記したように石器形態の斉一性を製作者の次元で理解することが可能としたならば、横倉遺跡形成の背後には複数の石器製作者の存在が抽出されてこよう。横倉がその背後に安山岩の原産地を控えた地理的条件下にあること[29]、そして調整剥片や砕片を伴出しない点などを考え併せると、数人が石器原産地で集中的に製作した石槍未成品の持ち出しに際して、各々が作った幾つかずつを集積した結果に形成された遺跡と考えることができようか。そして、それらの未成品は集団内で分配される一方、他の石材に拠った石材入手に際しての交換品として他の集団の手に渡ったものと考えられるのである。石器石材が近接地域に存在する綴

子遺跡、持川遺跡の石器群は前者に、そして遠距離地域の石材に拠って製作された未成品の出土した大宮バイパスNo.4遺跡、小鍛治原遺跡などは後者にそれぞれ該当するものと解することもできようか。換言するなら、これらのデポ遺跡は石器の動きの二つの側面（分配／交換）を言わば静止した状態で示している可能性があり、埋納の要因についてはここで触れる余裕がないが、その背景に当時の石器供給システムが潜在的に拘わっていた蓋然性がたかいと考えられるのである。そしてデポに於ける石器の集積行為もそうした供給システムのなかに機能的に位置付けられ、或る意味でそのシステムを制御する能動的な意味を有していたとさえ評価できるのである。

では、一体、何故そうした石器供給システムの機能部分を示す石器群が集積した形態を持って埋納されているのであろうか。この点に関しては想像の域を出ないが、次の点については注意を喚起しておく必要があろう。つまりこれらデポと認識された石器の纏まりは、その総てが一般的な遺跡では決して認められないような極端な集中度を持っていることであり、その半数以上は石器どうしが積み重なった状態で出土したことが確認されている。集積と言う言葉は正にそうした状況を的確に形容した表現と言えよう。このような石器群の折り重なった状態は、ただ単に地表面に石器を纏めて置いたのならば考えられない遺存状態である。後代の気候条件や生物生態の影響で、必ず遺物の移動が介在する[30]筈で、ましてや石器が重ねてあったとしたならばその安定性からしても遺存時点の状態が保持されていることは不可能に近い。では何故、これらデポの石器群はその集中の程度と折り重なった状態を留めて発見されるのであろうか。こうした遺存状態を示す背景について、現在、二つの要因を考えている。一つはこれらの石器が当時の地表面にそのまま残されていたのではなく、陸別遺跡で確認されたようにその殆どは遺構を伴ったものであった可能性がたかいという点である。陸別遺跡に於ける遺物分布を見ると礫層を掘り込んだその底面を基準とすると、遺物は覆土中に浮いた状態で認められていたことが断面図から読み取ることが可能である。しかも、その遺物分布は覆土の中で横一線に並び上下方向への移動は全く見られない。恐らく礫層にまで及ぶピットを掘り込んだ後、それを半分近く埋め戻してそこに遺物を置いて更にその上に土を被せたのであろう。こうした埋め土によってパックされた状態であったからこそ、発見時に於いても遺物の移動が殆ど認められなかったと仮定したいのである。たぶん他のデポの石器についても同様な条件下にあって遺存していたと考えられる。そしてもう一つは、大宮バイパスNo.4遺跡の黒曜石製の石槍観察で導き出されたように、石器がその器面を晒したままで埋納されたのではなく、獣皮や樹皮等でくるまれた状態で埋められていた可能性が強い点である。他のデポからの一括資料に対しても石器器面の詳細な観察が必要であるが、何よりも折り重なった状態でのデポからの出土は、石器類をそれらの皮で数本を単位として包んでいたことを暗示していよう[31]。それはまた、未成品を含む完形品である点から再び取り出して使用することを前提とした、一種の石器保管であった可能性が強い。石斧や石槍といった石器遺物は他の石器形態と比べて嵩張るうえに重量がある。とりわけ神子柴文化期のこれらの形態は大形であり、その持ち運びには困難が伴っていたであろう。そこで分配・交換という石器入手が恒常的でない一時的なものと考えた場合、一定の領域内を巡回するという移動生活を送る集団にとってはすぐに使用しない分の石器は、特定の場所に隠し置いておくほうが能率的であったのかも知れない。それはまた当時の移動のルートに沿った地点であり、再び立ち戻ることので

きる回帰場所に相当したとも考えられるのである。

4　デポ　―その多様性について―

未成品を含む完形遺物によって構成されたデポについては、前章でその成因を石器製作のシステムの中への位置付けを通して検討してきた。集積された石器の総てが完形品や未成品に拠っていることは、少なくとも集積という行為が単なる廃棄ではなくその後の使用を前提としていることを明示している。仮に廃棄と認定するのであれば完形品、未成品が何故その対象となったのかを説明付けなければなるまい。更にそうした廃棄がどうして石材や製作技術、そして形態的に斉一性を持った一群、しかも器種的に統一された一群の石器を纏めて廃棄したのか。そうした斉一性を有した石器一群が、同時に機能を停止し廃棄の対象となったとはとうてい考えられないのである。新たに取り出し使用することを前提として集積埋納した石器、加えてそうした石器群に対して斉一性が認められることは、分配なり交換によって入手した石器を石材や形態等の斉一性を単位として纏めてあったことを意味していよう。そして、このような斉一性を単位とした石器群を複数携帯して移動するのではなく、領域内の移動経路の中で周期的に訪れる場所に各単位（斉一的単位）ごとに埋納しておき必要に応じて取り出し、整形等をおこなって使用したものであったとも考えられるのである。こうした背景には、石核石器としての性格が強いこれらの器種的内容に加えて、分配や交換に拠る石器入手が恒常的に行われていたのではなく、集団の集合時や他集団との接触時という期間的に限定されていた為なのであろう。

さて、未成品を含む完形品を埋納したデポについては以上のような想定が導き出されるのであるが、次に問題となるのは欠損品を含んだ陸別遺跡や、そこに石核、石斧が組み合わさった状態で発見された鳴鹿山鹿遺跡の事例を一体どのように評価するのか、という点である。だが、この種のデポ成因については類例に乏しく、他資料との比較検討の余地がない為もあり、現在有効な分析手段を持ち合わせていないことを白状せざるを得ない。ただし、幾つかの点についてはこれまでの検討によって少なからず明らかにし得たし、それによってこれらデポの輪郭も朧げながら捉えることが適うであろうと考える。つまり、これら二遺跡では近隣地域に産する在地系の石材によって製作された一群と、遠距離地域に産する石材によった一群とが一緒に集積されている。陸別遺跡では黒曜石が在地系石材で頁岩が非在地系の石材であり、鳴鹿山鹿遺跡ではハリ質安山岩が在地系石材、流紋岩やチャート、頁岩が非在地系の石材であった。先の分析結果に照らし合わせて見るならば在地系の石材で製作された石器群は分配によって入手し、一方、非在地系の石材で製作された一群の石器は交換によって入手されたものと考えられ、それぞれは石質以外に製作技術や形態的な面で斉一性を持った石器群でもある。鳴鹿山鹿遺跡の検討のなかで触れたが、これらの遺跡には同一の石器形態ながら系統の相違した、換言するならば分配によったものと交換によって手に入れたものとが一括した状態で認められていることを知る。この点は持川遺跡や小鍛治原遺跡など遺物集積と比較した場合、際立った相違として認識されよう。両遺跡に於ける完形品と欠損品との拘わりあいをみると、陸別遺跡では石槍17点のうち完形品は４点で欠損品は13点、頁岩製の搬入品は４点でその中の２点が完形品であった。鳴鹿山鹿遺跡の方は既に触れたように、21点の有茎尖頭器のなかで完形

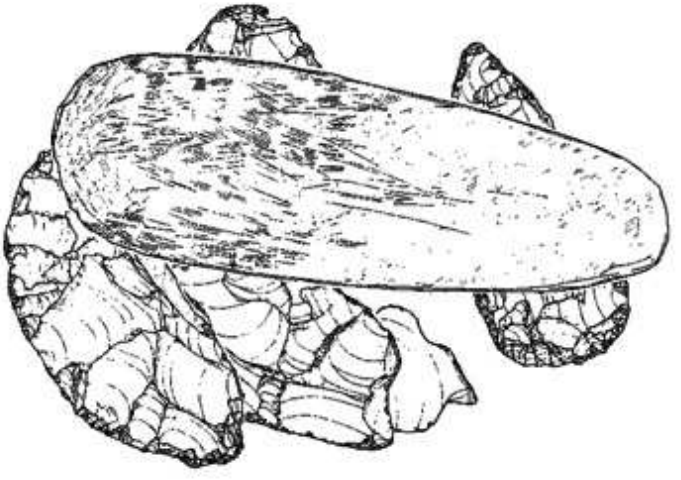
品は7点で欠損品は14点であり、搬入されたものに完形品を認めることができない[32]。

このようにして見ると、陸別遺跡で約三分の一、鳴鹿山鹿遺跡では二分の一が欠損品で、両遺跡共にそれら欠損品が完形品を大きく上回ることに気付く。欠損品の主体は陸別遺跡では在地系の黒曜石にあり、一方の鳴鹿山鹿遺跡では非在地系の流紋岩で、そこに完形・欠損のそれぞれと石器系統との間に一定の規則性を見いだすことは困難であることを知る。これらの遺跡では搬入か在地かに拘わらず、両者を一括して埋納していたと考えざるを得ない。ただし、そうした種別(非搬入品／搬入品）は石材や形態などの斉一性を拠り所としてそれぞれ纏められていた可能性が強く、鳴鹿山鹿遺跡では不明であるが、陸別遺跡ではデポ内に四ヵ所のそうした纏まりが知られているが、そこでは頁岩製品を含むものと含まないものとに弁別可能であった。鳴鹿山鹿遺跡の有茎尖頭器群についても、既に述べた三形態を単位として同様な状態で埋納されていたと想定されるのである。そして、一方ではこうした単位が基本的にはデポを構成する遺物集積の単位となっていた蓋然性がたかい。以上のように陸別遺跡、鳴鹿山鹿遺跡では共に石器系統に関係なく欠損遺物が認められ、しかもそうした欠損品のなかにも斉一性をもった石器群の存在が複数指摘できそうである。単一の斉一性を持った完形品によって構成された石器群によるデポと、これら複数の斉一性を持つむしろ欠損品を主体とした石器群によったデポとは、構成面からもその成因面から言っても明らかに一線をもって区分されるべきであろう。そうした構成面で注意しておきたいことは、通常のデポの石器群に比べて数倍に値する数量の石器群を保有しながらも、それらの大半が欠損品によって占められている点にあろう。これまでに分析したデポが7点前後の数量の石器から構成されていることは、裏返してみればそれが分配・交換にしろ一定の使用単位に相当したからであると考えられる。するとこの二つの遺跡の石器群は通常の使用単位を越えた数量を保有していることになる。一方の成因面では次の点が注意されるべきであろう。つまり、欠損品を主体的に組成する両遺跡であったが、該期石器群の欠損品については各遺跡内に廃棄された状態で残存しているのが一般的である。こうした廃棄の背景にはそれに伴って使用へと転化された石器（保有品か埋納品の取り出しかを問わず）の存在が潜在的に関与していた筈であろう。言わば埋納の単位は使用の単位でもあったと考えられるのである。しかしながらこの陸別遺跡や鳴鹿山鹿遺跡などでは、明らかにそうした使用のサイクルを越えた単位の石器群が欠損品として検出されているのである。この点も重要視するならば、そこに残されている石器群を素直に欠損品を集めたものと理解することには無理があろう。しかも欠損品の出現頻度は一時的というよりはむしろ時間幅を持った継続的なものであっただろうし、ならばそうした欠損品を移動に際して携帯し続けて一定場所へ廃棄したことを想定しなければならなくなってしまう。すると通常遺跡での欠損品の存在が説明できなくなってしまおう。以上の諸点を考慮した上でこれら遺跡の石器群を、その総てではないにせよ一部に関しては意識的に欠損したものも存在したと考えておきたい。このような意識的な欠損を裏付けるように陸別遺跡の石槍は「横位に折れたものが10ヶ中の8ヶにみられた」ことが注意されているし、また、埋納品について一部意識的に欠損するといった行為を想定してこそ、鳴鹿山鹿遺跡のような長大で非実用的な石斧であたかも蓋をするという特異な行為も一体的に評価する糸口が与えられてくるように思われるのである。

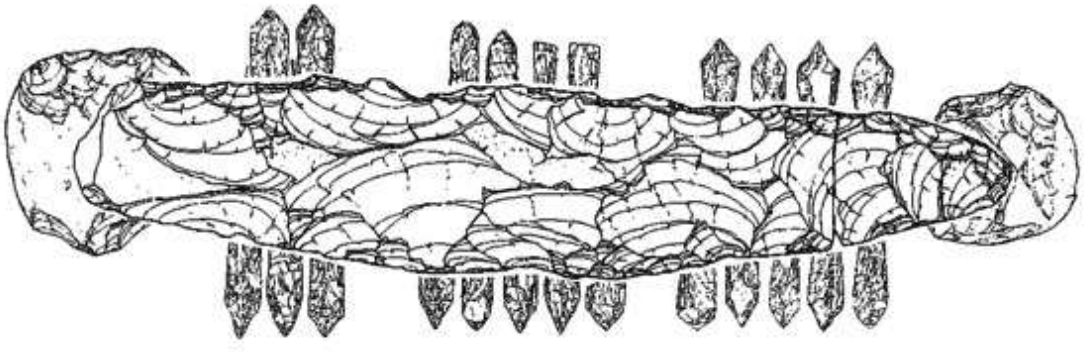
ところで、興味深いことにこれに類した埋納行為が福島県の仙台内前遺跡に於いても確認されて

いることである。仙台内前遺跡では、半月形石器、小形打製石斧、剝片、石核の上に長さ24.5cm、幅8.4cm、厚さ2.7cmの大形の磨製石斧が横たえられた状態で検出されていた。この磨製石斧はその全面に研磨が及んだ優品であり、遺跡から出土した三千点を越す石器群の殆ど総てが頁岩を使用している中で、この磨製石斧のみが泥質凝灰岩を素材として用いている[33]。硬質の頁岩を保有しながらも何故、軟質の凝灰岩を用いて石斧を製作したのであろうか。しかもそれは全面に研磨が及んだ大形の製品であった。これは報告者の指摘するように儀礼品であった可能性が強い。ここで磨製石斧の下から出土した石器群に目を転じると、いずれも使用を前提とした完形品とは考えられない一方、使用後の欠損品によって占められている事実も認められない。半月形石器は器面調整が粗く、その側辺には自然面を残しており、側辺形態からみても未成品であることは間違いないことと考えられる。同様に小形の打製石斧にしても側辺に剝離面を残存させたままのものであり、未成品としての蓋然性がたかい。これに対して剝片には削器と判別されたようにその側辺に刃こぼれの生じたものが存在するし、また、円盤状石核については求心的な剝離がその全面に及び器厚も極めて減じられ残核としての様相を色濃く示している。このように磨製石斧の下位に集積された石器群を詳細に検討すると、その特異性の一端が明瞭に浮かび上がってこよう。つまり、完成品ではなく使用以前の未成品と使用後の石器を一括して集積した後に、その上を覆うように実用品とは考えられない大形で全面に研磨を施した磨製石斧を置いているのである。

仙台内前遺跡に認められた埋納遺物とその状態は、基本的には鳴鹿山鹿遺跡と大きな差異がないように思われる。それは集積された石器の器種的な相違は存在しはするものの、完形品或は未成品と欠損品とを一括集積し、その上に実用品とは考え難



第6図　仙台内前遺跡の石器埋納図



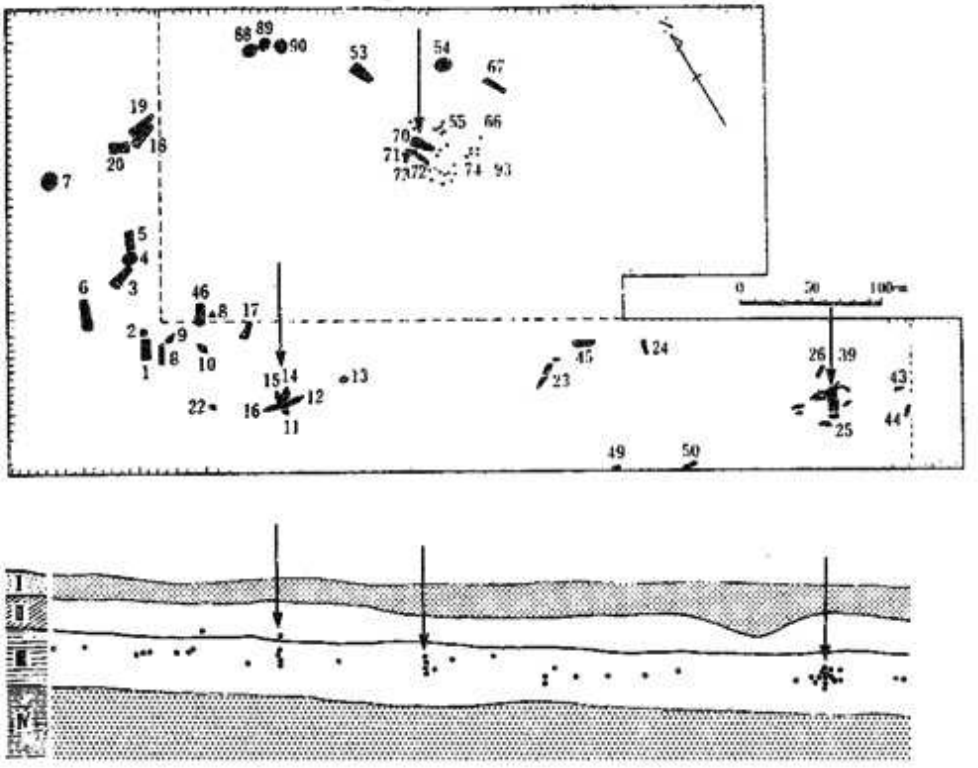
第7図　鳴鹿山鹿遺跡の石器埋納想定図

い大形の石斧（仙台内前遺跡と同様に鳴鹿山鹿遺跡にも全面を研磨した石斧が存在していることは看過できない）で覆うという行為が確認されている点に於いてである。また、使用価値の存在を認めた石核と残核という評価の違いは生じたが、両遺跡では共に石斧の下に石核を配置するという共通項で結ばれていることを知る[34]。陸別遺跡では石斧は確認されてはいないが、やはり完形品と欠損品とを含む点、同様な性格を持った遺構として把握することができようか。これらは未成品を含む完形品という使用以前の石器と欠損してしまった或は意識的に欠損して使用後の形態に仕上げた石器を纏めるという特徴を共有する。それは石器という道具のたどる軌跡をも暗示しており、同一の石器ながら時間的経緯に伴って生じる全く価値の異なる二つの側面を象徴しているようにも考えられるのである。いずれにせよそうした石器形態の対立的関係と非実用的な石斧の存在を考慮するならば、これらの石器集積とその埋納は先述したような石器の分配・交換を目的としたものと様相を異にしたデポと考えなくてはなるまい。そしてこうした、言うならば儀礼的な意味を持った石器群の埋納を、石器供給の形態を示す経済的な色彩の強い石器の集積とを一色端に把握していたことに従来の研究の盲点があったことも否めない事実であろう。著者はこれまでの分析を踏まえたうえで、従来デポとして一括されてきたもののうち前者を石器集積、後者を石器埋納と区分し、それぞれの構成とその要因を上記した範疇で理解しておきたいのである。

＜石器交換の場としての神子柴遺跡＞

さて、神子柴文化期のデポとして広く知られているのが長野県神子柴遺跡[35]である。恐らくこの神子柴遺跡に触れずして、該期デポの問題を論じることは不可能なことであろうし、また片手落ちな内容となってしまうと言う危惧も拭い得ないであろう。これまでの検討で神子柴遺跡に関して触れずに来たのは、一つの考えがあってのことである。従来の研究の大半が神子柴文化やその特質を挙げる場合にのみ個別的にデポの存在を取り上げ、その実何等分析を試みずに今日に至った経緯がある。こうしたなかで田中氏が神子柴遺跡の石器群の分布を詳細に分析されたことは高い評価が与えられよう[36]。しかし、田中氏の研究は神子柴遺跡をデポと認識したうえで、他の製作・生活遺跡との比較を行ったことから、神子柴遺跡以外のデポ遺跡が等閑視されてしまった印象が強い。為にデポの内容とその性格が一面的に捉えられてしまい、結果的に該期遺跡群との関連性とそこでのデポ遺跡の占める位置が不鮮明となってしまった感は否めない。本文ではむしろ一般的なデポ遺跡の分析に力点を置いた構成を採用してきたのは、神子柴遺跡の問題はこうした一般的デポ遺跡の分析を踏まえた上での比較研究に拠ってこそ問題が明らかにし得ると考えたからであった。

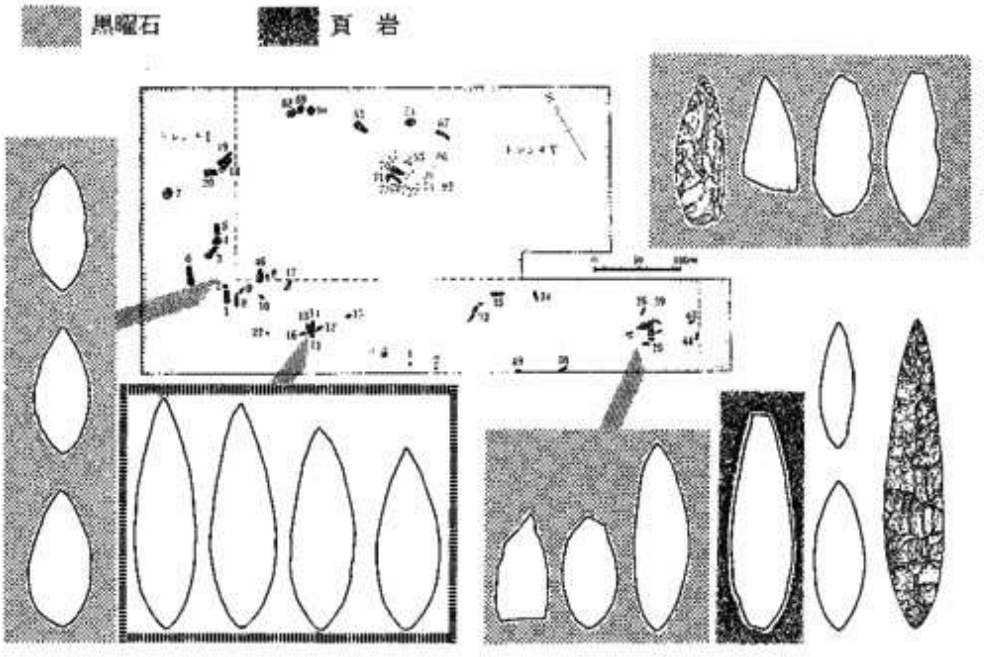
さて、神子柴遺跡の遺物群構成とその分布論的意味については、概ね田中氏の見解を世襲して置きたい。ただし、神子柴遺跡の石器群をこれまで検討を続けてきたデポと比較すると、その石器組成と分布状態、石器石材や石器形態の斉一性等の点で明らかな差異を認めざるを得ないのである。第一に神子柴遺跡には石槍、石斧を中心としながらも石核や掻器、削器、剝片、黒曜石原石や砕片、砥石をまでが認められている。この点でこれまで見て来たような単一の器種によって構成されたデポと根本的に様相を異にしている。しかも、



第８図　神子柴遺跡と石器集積箇所（矢印部分）

各石器群の利用石材を見ると、石斧が閃緑岩や安山岩、粘板岩を用い、石槍は黒曜石、角岩、粘板岩そして頁岩を、掻器では頁岩、剥片類では黒曜石がそれぞれ多用されており、各々の石器形態と利用石材との間に統一的な相互関連が見いだせない。こうした点に加えて遺跡内に木炭の分布が確認され、黒曜石資料には互いに接合関係を示して原石形状に復原される例や、またその他の資料中には欠損品も比較的多く認められているのである。単一の石材に拠った同一形態の完形器種が纏まって出土している、これまで検討したデポとの相違が改めて認識されてこよう。

ところで、神子柴遺跡の石器群は既に良く知られているように各種の完形石器形態が一定の分布的な纏まりを持った状態で長楕円形の弧状に近い分布を形成し、その中央部分は遺物分布の空白部となっている。その部分には少量ながら木炭の分布が確認され、住居跡認定の根拠として引用されてもいる[37]。石器群は弧状を呈する形態のなかにあっても更に直径１m前後の単位的な纏まりを持ち、それぞれの単位分布のなかでは単一ではないものの特定の石器形態が主体となる傾向が認められるが、大局的に見れば東側で石核類が、西側では石斧、南側では掻器がそれぞれ他の器種を圧倒した出土数を誇っていることが知られてこよう。そうした１ｍ前後の石器群分布の単位的存在を指摘したうえで、より上位の石器分布の単位性をこの三群に認め、各々をⅠ～Ⅲ群と仮称して区分しておきたい。Ⅰ群からⅢ群に於ける石斧、石槍、掻器、石核それぞれの出土数を見ると、Ⅰ群が２．０．４．５点、Ⅱ群が７．７．２．４点、Ⅲ群で５．７．９．０点というように各群単位に器種的



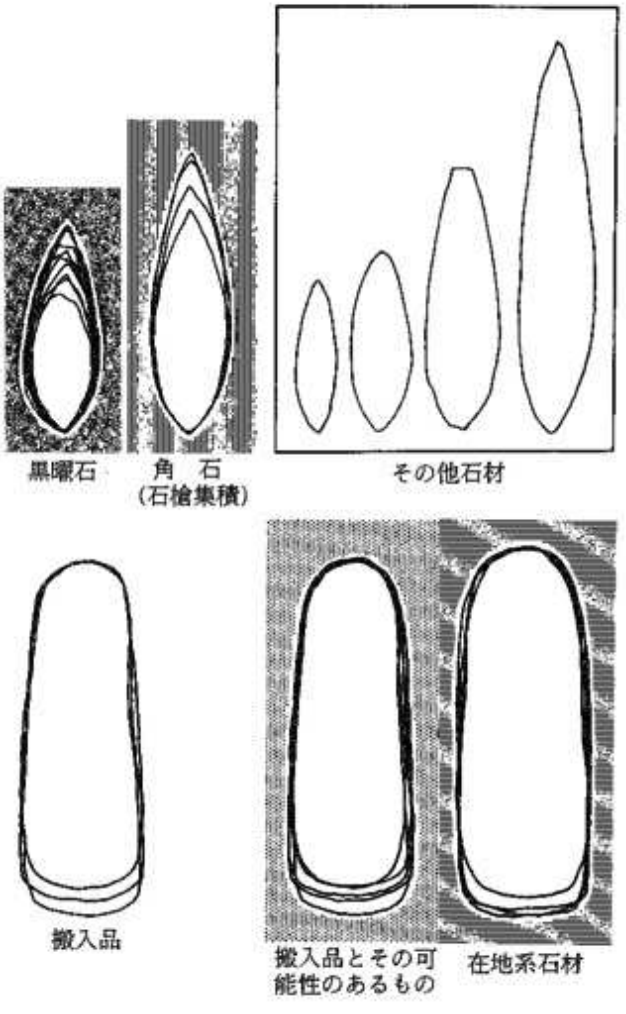
第9図　神子柴遺跡の石槍

なばらつきの在ることに気付く。ここで総点数に目を向けるとⅠ群が11点、Ⅱ群が18点、Ⅲ群が21点とⅠ群を除いて20点前後の石器数量が確認されるが、Ⅰ群にはその他に黒曜石の接合資料が32点存在し、それを加えると最も多くの石器を有する単位となる。しかし、こうした石器数量と器種別数値から何等かの特徴を指摘することは不可能であり、この点からでは神子柴遺跡の遺物構成の背景を知る手掛かりは得られそうに思えない。だが、これら神子柴遺跡の石器分布を三群に分割することは各群の空間的隔たりに加えて次の点からも一定の意味が在りそうである。つまり、神子柴遺跡の出土遺物の断面投影図を瞥見すると、Ⅲ層とされたローム層上部に石器群が包含されていることが一目瞭然であるが、注目されるのはそうした遺物投影図のなかに石器が縦方向に重なったように出土した状況が示されていることである。Ⅰ群では石斧と掻器、刃器、Ⅱ群では石槍、Ⅲ群では掻器がそれぞれ積み重ねられた状態で出土したことが理解されよう。こうした石器の出土状態は、改めて言うまでもなくデポ遺跡に於ける石器集積と同様なものであり、断定はできないがⅡ群（石槍群）とⅢ群（掻器群）のものは集積として、これに対してⅠ群（石斧＋掻器＋削器）のものは構成内容からむしろ埋納的な様相を呈していると言えようか。

神子柴遺跡では、石斧と石槍そして掻器、削器などといった該期の基本的石器組成を保有した上に、弧状の遺物分布を構成し、その中央部分には木炭の分布を持つ極めて生活的色彩の強い様相を示す一方で、こうした他のデポ遺跡と同様な石器群の集積・埋納行為が識別されるのである。この時期の遺跡では特異な現象とも言える石核の量的安定も、一見すると生活色を示す根拠としてあげられようが、それに対応すべき剥片類の欠如は逆にそうした生活色を否定する材料と看做し得るであろう。確かにⅠ群に存在した黒曜石資料は

接合によって元の原石個体に復原されるものであったが、実は本資料は剝片剝離作業工程を示すものではなく「火熱により破砕したものである」ことが明瞭である。こうして見ると神子柴遺跡は生活跡的な色彩の薄い、だが、他のデポ遺跡とは様相を異にする非常に特異な遺跡としての姿が改めて浮き彫りにされてくるのである。では一体、どのような背景の基に神子柴遺跡が形成され、こうした類例の無い遺物の組成とその分布はどうした契機に顕在化したものなのであろうか。

神子柴遺跡を代表する石器形態は、言うまでもなく石斧と石槍である。これらは「神子柴型」として型式学的に把握される一定の範疇を構成しているが、さらに詳細に検討すると石質等を単位として極めて強い斉一性を有していることが抽出される。石斧については閃緑岩様のものと粘板岩質のものがそれぞれ斉一性を示し、石槍では黒曜石、角岩を石材としたそれぞれがやはり強い斉一性を持っているのである。また、掻器についても大半を占める頁岩製のものは、大形石刃の末端に僅かに刃付けをしたもので、斉一性とまでは言わないにしても該期掻器型式にあって極めて特徴的な一群の石器であることは注意されよう。ここに見る三器種の斉一的様相生成の要因として、デポを構成する石器と同様に製作者の単位を表象したものと評価しておきたい。事実、II群の集積区に纏められた石槍は、石材やその製作技術、平面・断面形態に於いて特定石槍のコピーの感さえ抱かせるものである。このように器種ごとに認められる斉一性のそれぞれを、石器製作者の技術的個性という視点から改めて検討してゆくこととしよう。最初に注意されるのは、各斉一性を持った石器群はII群の石槍のように特定の場所に纏まった状態で検出されているのではなく、数点ずつ点在するかたちで認められることである。たとえば石斧では閃緑岩製か粘板岩製を問わず、II群から集中した状態で出土してはいるものの、粘板岩製の石斧がI・III群に一点

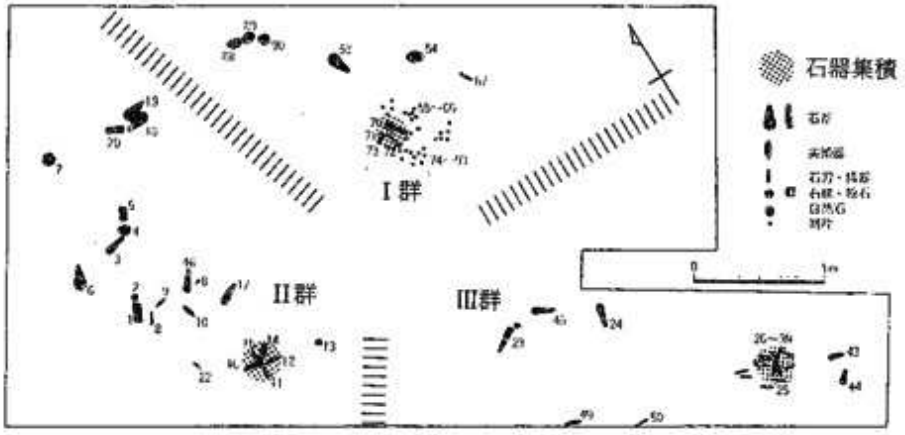


第10図　石槍・石斧の斉一性

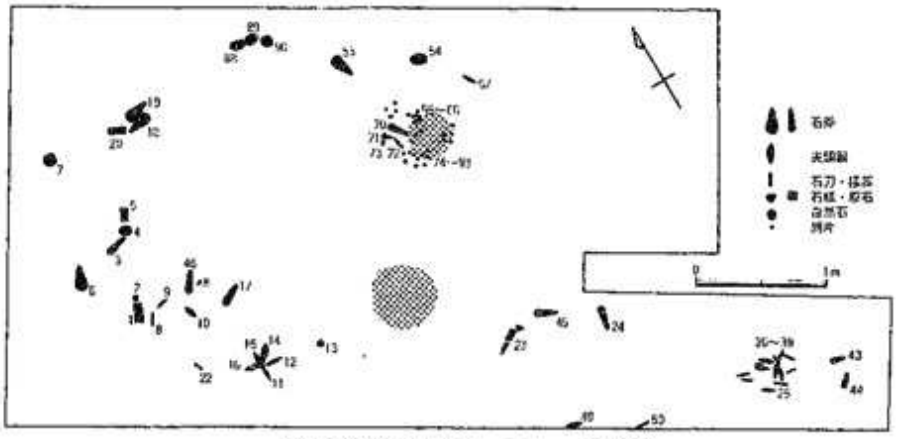
ずつ、そして閃緑岩製のものがⅠ群に1点認められている。石槍ではどうであろうか。神子柴遺跡から出土した石槍は18点でその内で黒曜石製のものは10点、更に地点の明確なものは僅かに6点である。この6点の石槍はⅡ、Ⅲ群で3点ずつ検出されている。奇異なことに黒曜石を最も多く保有するⅠ群には黒曜石製の石槍は見られないが、表採品とされた4点の内何点かはここに帰属するものなのかも知れない。頁岩製の掻器に関してはこうした分布状況を最も顕著に示しており、総点数11点のうち8点までがⅢ群に存在し、2点がⅠ群、1点がⅡ群に見いだされるのである。

こうした石器群の分布域を越えた石器点在については、ここで詳述するまでもなく旧石器時代遺跡のブロックに顕著に見いだされる特徴であり、その背景と意義については著者も砂川遺跡等の分析を踏まえて再三にわたって論及したところである。神子柴遺跡の石器分布もこうした石器の交換関係が認められることは、看過し得ない重要なことと言えよう。つまり、Ⅰ～Ⅲ群の石器分布は空間的、器種的な自立性を示す一方で、各々の群を単位として保有した特定石器を他と交換している可能性が指摘できるからである。それはⅠでは黒曜石製の石槍や黒曜石それ自体であり、Ⅱ群では石斧、Ⅲ群では頁岩製の掻器であったと考えられる。また、Ⅱ群の石器集積を構成する石槍と同様な角岩質の刃器も、Ⅰ、Ⅲ群から1点ずつ発見されており、より詳細な分析が可能となればこうした石器形態の交換はより一層鮮明に抽出することが適うであろう。Ⅱ群に於ける石槍、Ⅲ群に於ける掻器はそうした交換の為にストックされていたものであったのかも知れない。各群を形成する主要石器石材はそれぞれ地域を異にした、言うならば系統の異なったものであり、そうした石器群を持ち寄り交換を行った、正にそうした場所こそがここ神子柴遺跡であったと考えたいのである。石斧や石槍、掻器そして石核までもが全く剥片、砕片の類いを含まないことから、これらの石器が完形品として遺跡内に持ち込まれたことは疑いない。恐らく神子柴遺跡で行われた石器交換に際しては、その材質や形、機能性などを示準として一定のレートが決められ、その基に交換が遂行されていたものと思われる。特に在地系の石材で製作されたものと非在地系石材で製作されたものとの交換レートは、通常のレートを大きく上回るものであった可能性がたかい。とりわけ頁岩の製品はこの地方では極めて貴重なものであったと想定される。今後、詳細な報告がなされれば、分析次第でこうした系統的に異なった石器どうしの交換レートさえもが抽出できる可能性が存在しよう。

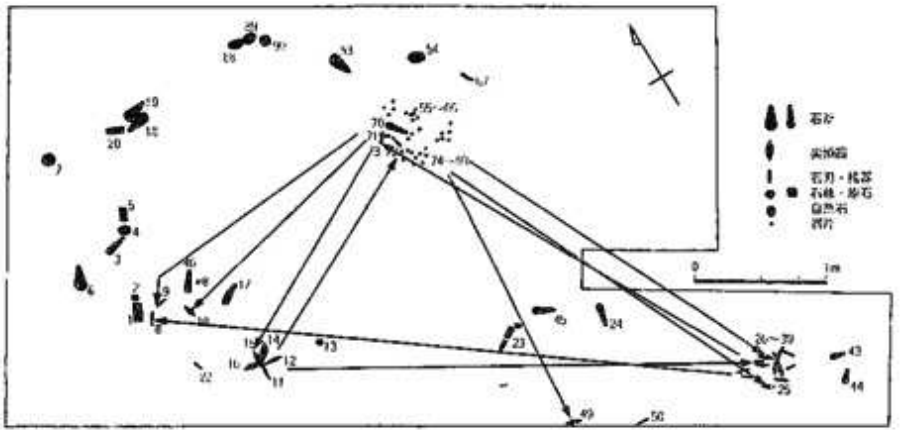
神子柴遺跡はこれまでの分析に拠れば、地域を越えた石材的に系統の異なる石器群を持ち寄り、互いにその交換をおこなった「石器交換の場」であった蓋然性がたかい。ここで三つに区分されたそれぞれの遺物分布域の形成に関与したのは、同一の集団でないことは言うに及ばず、「もの」や「ひと」の交換を通じて結び付いた隣接集団の人々であったと考えられる。そして神子柴遺跡が「共同生活の場」ではなく、あくまで「石器交換の場」として形成された遺跡であったとしたならば、そうした集団は通常の世帯構成を持つものではなく、石器という交換物資の製作や知識に長けた成人男性であったと想定されるのである。彼らはまた、各集団の石器製作を中心的に行った一種のスペシャリストであった可能



遺物分布と群構成

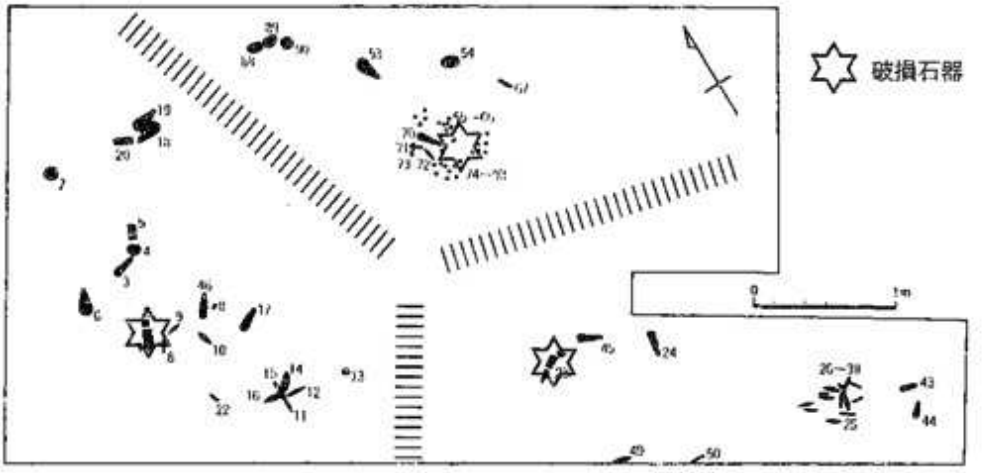


木炭の分布（スクリーントーン部分）



石器の交換（同一石材石器の分布）

第11図　神子柴遺跡の遺物分布（田中：1982に一部加筆）



第12図　神子柴遺跡における破損石器の分布（星印）

性も指摘できようか。だが、彼らの持ち寄った石器類は、神子柴遺跡の遺物分布状態から察する限り交換されることなく放棄されてしまったと推測される。このように石器の交換が成功裡に終わらなかった理由についてはいろいろな解釈は可能であるが、その背景に関して論理的な説明を加えることは不可能と言わざるを得ない。ただし、こうした石器交換の不履行を示唆するような資料の確認される点は注意しておく必要があろう。それは先のⅠ～Ⅲ群に区分された遺物の単位的分布のなかに、明らかにここ神子柴遺跡で意識的に壊されたとしか考えられない石器が存在する点である。即ちⅠ群では黒曜石の原石であり、Ⅱ群では黒曜石製の石斧であり、そしてⅢ群では大形の石槍である。Ⅰ群に属する黒曜石原石は、その周囲に木炭の散布が確認されていることからも判別されるが、明らかに過熱することによって壊されたものである。本資料が原石形状に復元可能なことは、一方で過熱によって割れた資料が使用されることなく廃棄されたことを雄弁に物語っていよう。黒曜石は当時にあっても極めて貴重な石器石材であったろうが、何故その原石を壊すような行為が認められるのか不可解である。Ⅱ群に於ける黒曜石製の石斧の欠損も同様な点で見落とすことができまい。黒曜石という石材と石斧というその形態から、この石器は儀礼的な意味をもった威信財であった可能性も指摘できよう。それが上半部分で真二つに割られているのである。一方Ⅲ群に於いては長さが25.5cmにも及ぶ超大形の石槍が三つに分断されたかたちで検出されている。この石槍は柳葉形状を呈した長大で薄身に仕上げられた逸品で、そうした形態的特徴から「槍先としてよりも短剣としての機能」を想定された資料であるが、これもやはり儀礼的意味をもった石器と考えるべきであろう。これら交換価値の高い、或は儀礼的価値の在る石器を何故に破損してしまったのであろうか。各集団の石器製作のスペシャリスト達が寄り集い、各人が交換品として製作・入手した石器を互いに一定のレートに従って交換したものの、何らかの事情によってそれらの石器は各集団へと持ち帰られることなくその場に残された。そうした成功裡に終わらなかった石器交換の原因か結果かは不明であるが、各人は交換に際して最も価値の高い石器をそれぞれが破壊す

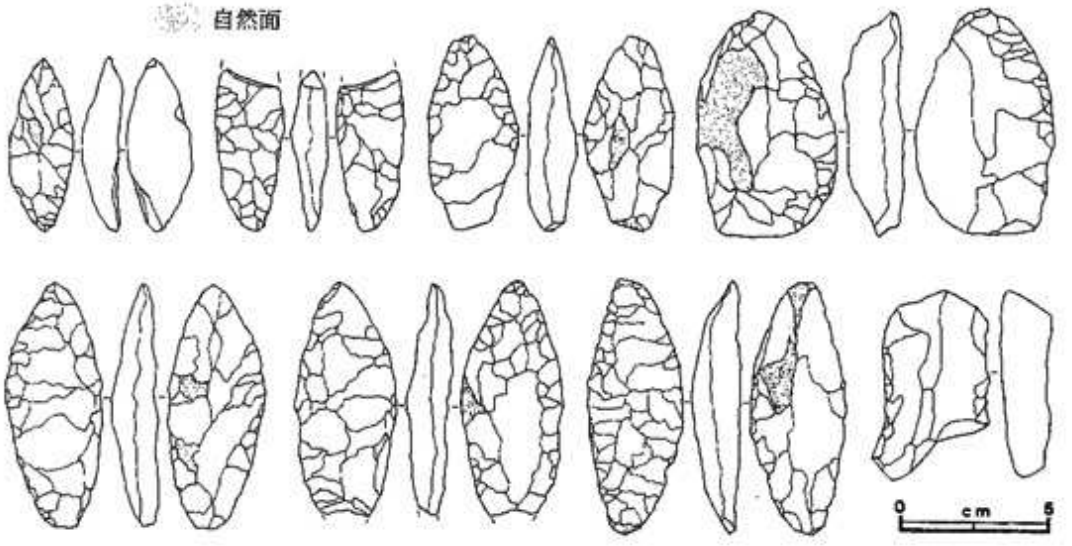
るという行為を遂行する。神子柴遺跡とその石器群は、一方でこうした縄文時代草創期に於ける石器交換の実態とそれに伴うイデオロギーの一側面を垣間見せてくれるのである。

5　神子柴文化の遺跡構成とデポの位置

完形品を中心に集積したデポは神子柴文化期の遺跡のなかで特異な存在である。だが、そうした特異性は通常認められる遺跡内容との比較を通してこそ抽出される差異であり、それらとの比較を省略してはその特異性を構成する範疇も極めて曖昧なままであろう。本章ではその比較の意味を含めて一般的遺跡の検討を経て、デポの成立要因をその基盤から改めて問い直し、今後の研究方向の指針としておきたいと考える。

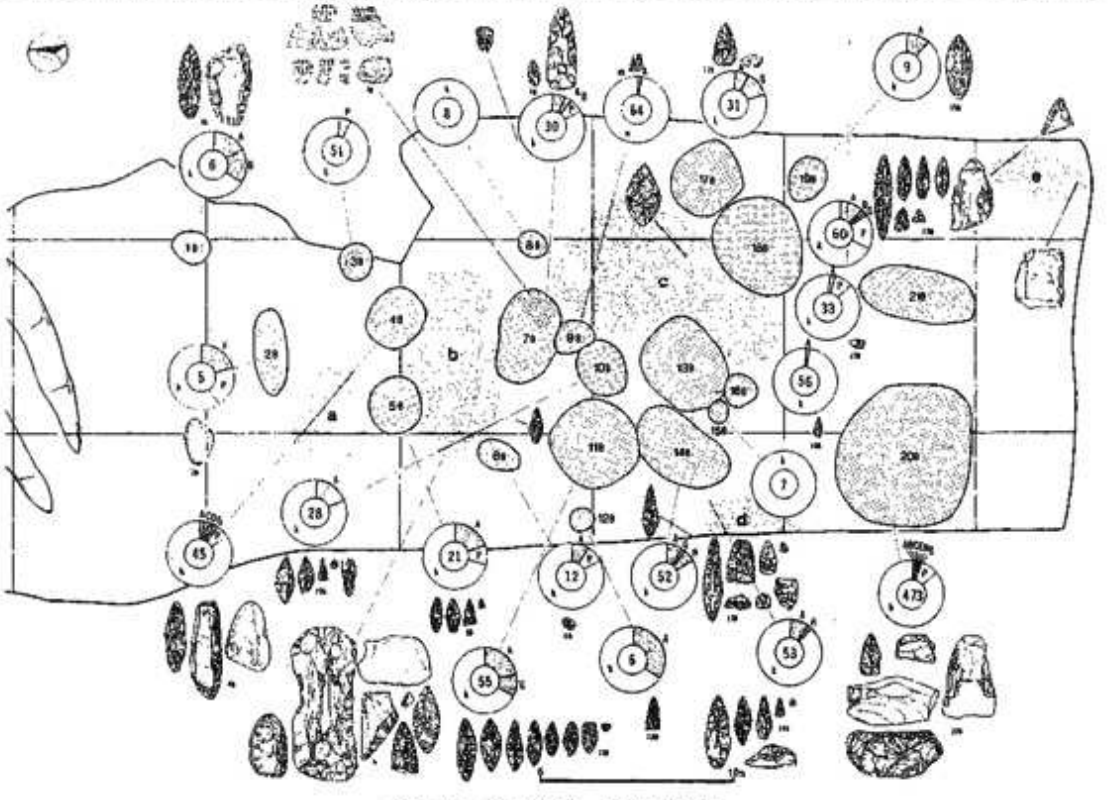
神子柴文化の遺跡に於いて看過できないことは、一般的に石器製作の痕跡を留どめていないか、或は希な例が大半を占めている点であろう。関東的視野に限定した場合でも、埼玉県の中道遺跡[38]、東京都の井の頭遺跡A地点[39]では砕片類を全く伴っていない。茨城県の後野遺跡[40]では剝片を比較的多く含むものの、それら剝片類には石槍、掻器、削器などと同一母岩のものは見当たらず石器製作に伴うものと一律的に解することはできない。長野県の唐沢B遺跡[41]、福島県大坂遺跡[42]、同油王田遺跡[43]、山形県東山紺野遺跡[44]、同上屋地A遺跡[45]、岩手県夏油温泉遺跡[46]、青森県長者久保遺跡[47]、同大森勝山遺跡[48]などでも石核、砕片の類いを含まず、そこに石器製作の痕跡を認めることは困難なことを知る。青森県大平山元Ⅰ遺跡[49]などでも石核が検出されてはいるものの、そこでの石器製作の痕跡は貧弱であることが認められる。いずれにせよ旧石器時代遺跡の遺物構成に認められるように、各石器形態が製作工程の剝片や砕片の類いを伴いながら遺物分布を形成した痕跡をそこに見いだすことは困難であろう。では一体、神子柴文化の基本的な石器組成である石斧、石槍、掻器、削器、彫器などはいずれの場所で製作され遺跡に齎されたものなのであろうか。

現状に於いても神子柴文化に属する遺跡数は少なく、一定の時間幅の中で等質的視点から遺跡群

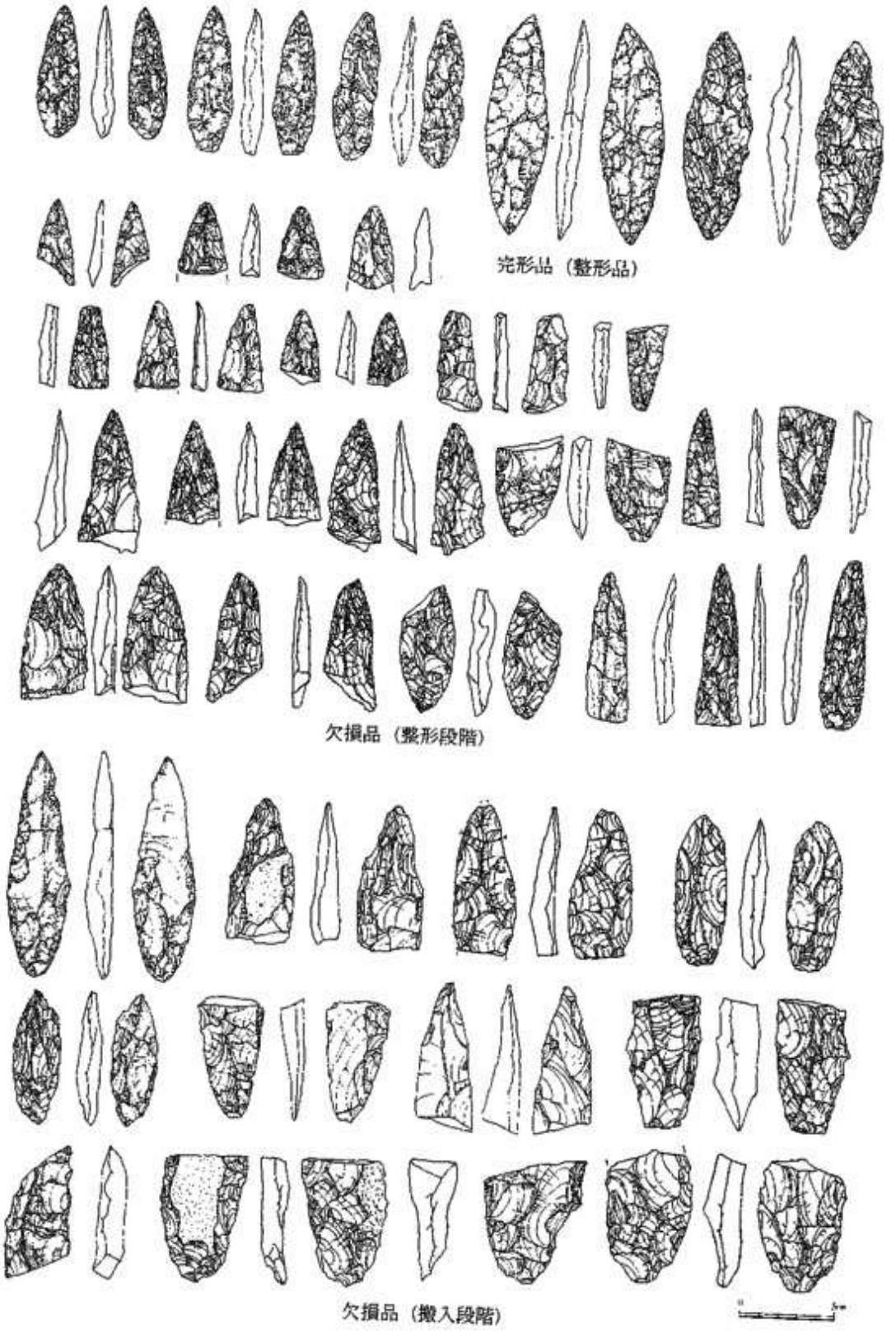


第13図　大宮バイパスNo.4遺跡

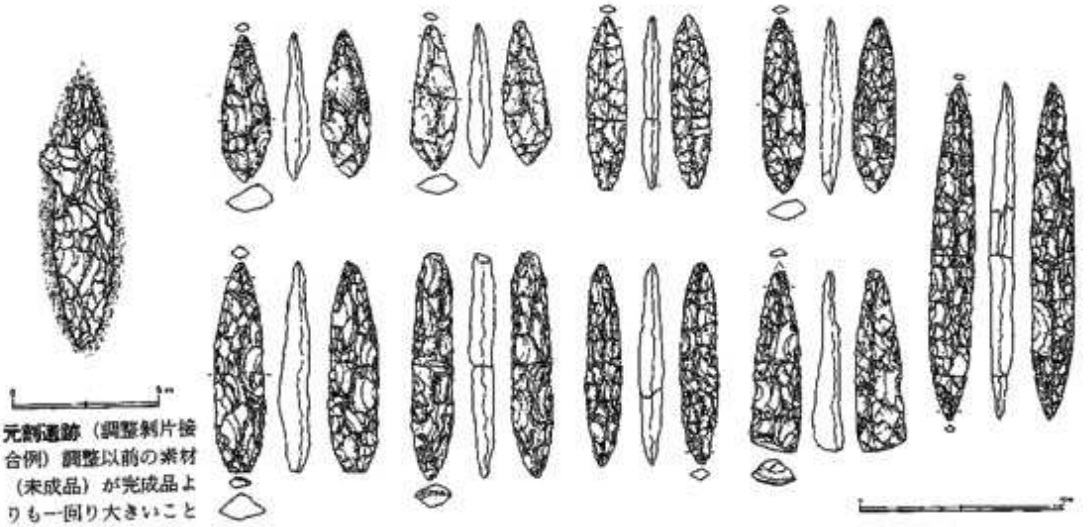
を検討するに足る資料に事欠く状況にある。そこで編年的見地からすれば時間差を持つものの、同一の文化系統下にあると考えられる遺跡の比較を通じてこの石器生成の背景を検討して行かざるを得ない。そうした認識の基に神子柴文化期の遺跡に目を転じて見ると、上記したような石器製作の痕跡を留めない遺跡が圧倒的多数を占める中で、幾つかの遺跡では未成品を含む大量の剝片、砕片が見いだされていることを知る。新潟県本ノ木遺跡[50]や東京都前田耕地遺跡[51]がそれに該当しよう。これ等の遺跡では該期遺跡に認められる通常の石器組成が見られるものの、それらの石器形態と剝片類との量的比率は到底対応関係にあるとは言い難いものである。更にそこでの石器組成に目を転じると、組成中で特定の石器形態（石槍）の占める割合が卓越している傾向が看取されることは重要であろう。これらをもって「石槍製作跡」と言われる所以でもあろう。そうした「製作跡」としての遺跡の顕在的特徴を次の三点に認めておきたい。すなわち1)遺跡付近で石器石材の確保がなされている、2)特定の石器形態の量的比率が他を圧倒するものである、3)未成品を含む剝片、砕片類が大量に見られ、しかも未成品には製作工程に対応した段階が認められる、以上の諸点である。本ノ木遺跡では削器が30点と石斧が数点検出されたが、未成品を含めた石槍の数量は1200点を遥かに越し、その製作時に生じた剝片類は膨大な数量に及んでいる。同様な状況は前田耕地遺跡でも認められ、1600点を越える石槍とその未成品のほかには数十点の削器を組成しているに過ぎないが、剝片、砕片の総量は100万点にも及ぶものであると言う。こうした石器数量を瞥見する限りに於いても、これらの遺跡を単に生活跡として他の遺跡と同列に扱うことができないのは明白であろう。本ノ木遺跡や前田耕地遺跡では該期石器形態の内でも、石槍に限定された形で集中的にその製作に従



第14図　寺尾遺跡・遺物分布図



第15図　石山遺跡の石槍群



元割遺跡（調整剥片接合例）調整以前の素材（未成品）が完成品よりも一回り大きいことを明示している（アミ部分）

第16図　南大溜袋遺跡

事した痕跡をとどめており、しかも石槍の未成品を除けば削器類の卓越という石器組成の極端な偏りからしても、その石槍製作の契機が時間的に限定された、恐らく季節的なものであったことを窺わせているのである。前田耕地遺跡で検出された住居跡の中からこうした想定を傍証するように、季節的塑土を行う鮭の歯が発見されていることは非常に示唆的といえよう。恐らくは、そうした鮭の塑上時期を見計らったか否かは別として、同じ季節に河原に居を構えて石槍の製作を集中的に行っていたことは間違いないと言えよう。この集中的という背景には時間的な限定の意味の他に、また二つの意味を含ませている。前田耕地遺跡の第6地点は、上記したように膨大な数量の石器群が検出されているが、それに伴って発見された住居跡は僅かに1軒を数えるのみである。無論、検出され得ない遺構存在も当然予想されようが、それにしても1700点を上回る石槍数に比べ如何にも少ない感じがする。しかし、ここで製作された大量の石槍群が集団内での分配や集団外への交換品としての意義を負ったというその背景を考慮すれば妥当な数量と看做すことができようか。集中的という言葉にこうした石器供給の契機的な意味をも与えておきたい。もう一つはやはり前田耕地遺跡の住居跡に拘わることであるが、1軒の住居の存在に拠って想定されるところの「世帯」に、果たして石槍の製作に拘わることのできる成人男性がどれ程居住していたであろうか、という問題である。円礫を分割しその周縁に数回にわたった調整加工を施し、木葉形や柳葉形の形態を呈する石槍に仕上げる[52]のは石器製作の労力以上に極めて専門的な技能を不可欠とするものである。しかも、石槍の製作数量は数十点の単位ではなく、20m×30mという狭い発掘区で千点を遥かに上回るものである。こうした石槍製作のような特異な労働部門に関しては集団構成員の総てが拘わったとは勿論考えられないが、成人男子のなかでも技能的に優れた者が特に専従的に関与していたのではないだろうか。前田耕地遺跡の石器数量に比較しての遺構数の少なさとその貧弱さの背景には、石器製作に長けた技能を持った男子（石槍製作のスペシャリスト）が複数、或る時は地域集団を越えて集合し、一定の期間内に石槍の製作に専従していた蓋然性がたかい[53]。こうした所謂石器製作跡と認識さ

れる遺跡は、当時の石器製作に優れた男性が一定の期間内に複数集い、集中的に特定の石器製作に関与した結果に形成されたものと評価しておきたいのである。

ところで、該期遺跡のなかには前田耕地遺跡や本ノ木遺跡程ではないが、石槍の未成品を比較的多く含み調整破片や砕片類を多量に出土する遺跡が存在する。群馬県の石山遺跡[54]、千葉県南大溜袋遺跡[55]、神奈川県寺尾遺跡[56]などがそれに該当しよう。寺尾遺跡を除くと各遺跡の石器組成は不明であるが石槍、剥片・砕片に限ってみれば、石山遺跡で103点、2479点、南大溜袋遺跡で85点、700点、寺尾遺跡では58点、1096点という数量が報告されている。これ以外の石器では寺尾遺跡で削器が5点、石斧が6点、石山遺跡では削器が3点といった程度に留どまってしまう。この石器組成に於ける数値を一瞥した限りでも、それぞれの報告で述べられているような遺跡の石器製作跡としての性格が肯首できるであろう。しかし、これらの遺跡は同じく石槍の製作に拘わって形成された遺跡であろうとも、製作跡として本ノ木遺跡や前田耕地遺跡と同列に扱ってよいものであろうか。まず第一に未成品を含めた石槍の数量的な問題である。両者を単純に比較しても十倍以上の開きがあり、それは同様に剥片類にも当て嵌まるものである。前田耕地遺跡などと比較して石山遺跡や寺尾遺跡などは未成品の数からしても、その十分の一以下の数量にさえ及ばないことを知るのである。こうした背景に関しては石器製作に拘わる時間幅の問題ではなく、遺跡自体の規模・性格の差異として認識する必要があろう。これ等の三遺跡は前田耕地遺跡や本ノ木遺跡のように眼下に石器原材が、言わば無尽蔵に存在する遺跡立地にないこともそうした要因の一つとして考慮されようものの、見落とすことができないのは石山、南大溜袋、寺尾の三遺跡では石核が一点も検出されていないことである。礫か或は分割礫を遺跡へと搬入し、それを総て消費し尽くしてしまったとすれば石核の欠落も頷くことのできるものであるが、例えそのように仮定しても石槍製作の初期工程の器体調整時の大形剥片等は遺存する筈であろう。それらをも欠如させていることは、これらの遺跡では石槍の製作に際して礫や分割礫、或は大形剥片を持ち込んでそれを加工して石槍を製作したのではなく、両面調整品としてある程度の形態を整えた未成品として搬入した石器を製品に仕上げた、そうした意味での製作跡であったとの考えが導き出されてくるのである。剥片類の主体が調整剥片にあることは、こうした背景を如実に物語っていようし、未成品の殆ど総ては石槍製作の最終工程である整形段階での欠損品であることも見落すことができまい。加えてこれらの遺跡が石器石材の産地から離れた距離に位置することも、未成品の整形（仕上げ）を行ったという意味での製作跡としての性格を暗示しているように思われるのである。

こうして見ると縄文時代草創期の初期、神子柴文化の段階では、該期石器組成の中心的位置を占める石器、特に石槍が遺跡単位に製作されたものではなく、特定の遺跡で一定期間の内に集中的に製作されたものであったとの想定が導き出されてこようか。その製作には石器石材の入手が容易な低位段丘面（礫床面）が選定され、そこに石槍製作の技術に優れた男性が集団を越えて複数集合し、集中的に石槍の製作に従事していたものと考えられる。こうして製作された石槍は、恐らく100本前後程を単位として各集団へと持ち帰られ、それぞれの集団内で整形が行われていた可能性がたかい。こうした集団での石槍の整形加工は、寺尾遺跡などを念頭に置く限り一時的なようにも思われるが、その総てを整形してしまうのではなく何割かは未成品のままであったのかも知れない。何故ならば、

先のデポの遺物構成から知られたように、完成品と共にそうした未成品が集団内で更に分配されていたことも十分に考慮されなければならないからである。また、一方では各集団への持ち帰りや分配と共に、そうして集中的に製作した石器群を、他集団の製作した石質を異にする石器や形態的に相違した石器と交換することも当然考えられて然るべきであろう[57]。

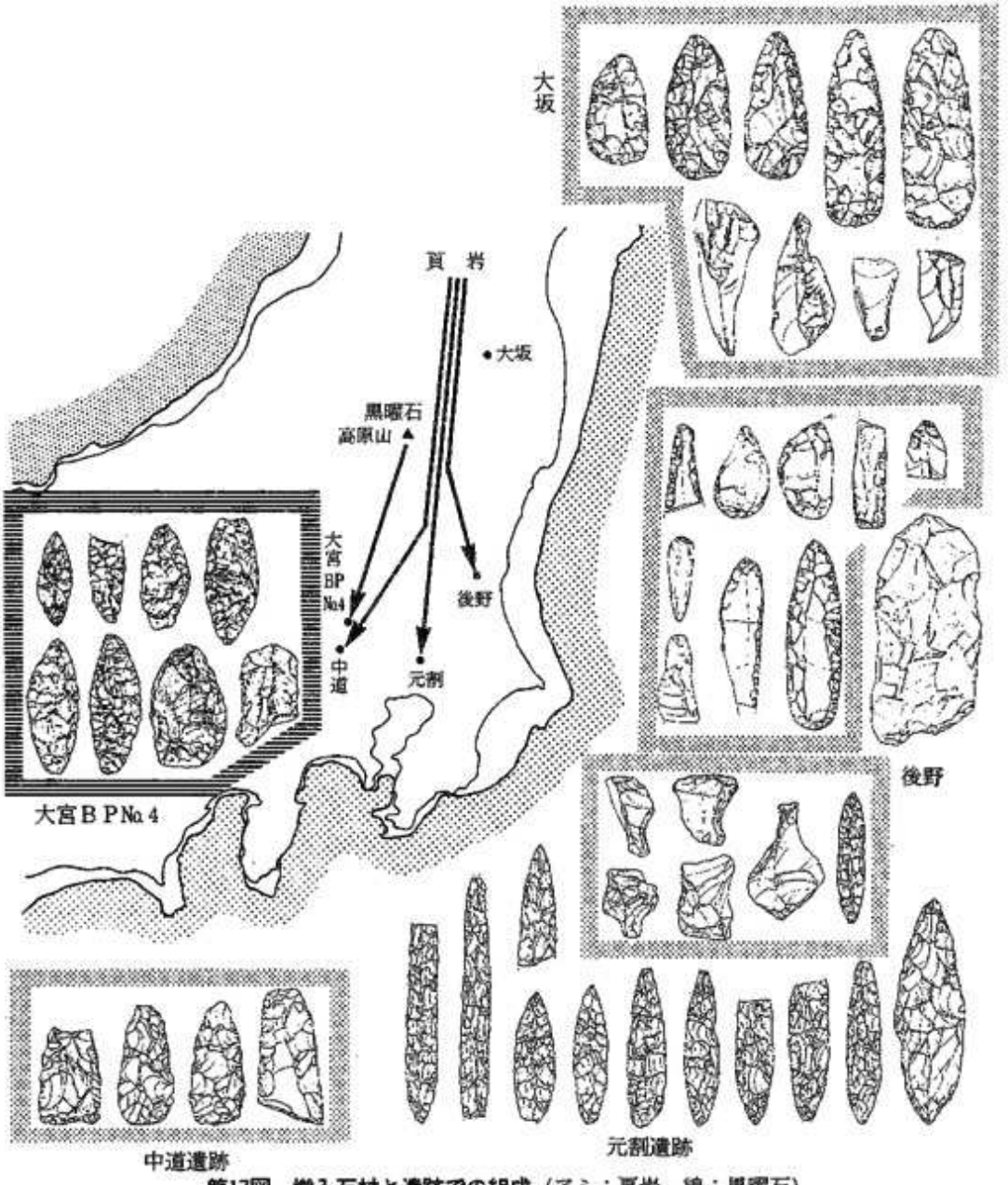
さて、このように神子柴文化期の石器生産とその供給を構造的に理解するならば、これまで検討してきたデポの位置付けも朧げながら明らかになってこようか。デポを構成する石器遺物は、その殆どが欠損品を含まない完形品か未成品の集積によって占められていた。そうした集積は一部では「隠匿」として解されてきた経緯も存在するが、出土した石器は材質（石材）や製作技術、形態などの点で該期遺跡に普遍的に見い出されるもので、とりたてて儀礼品や威信財的な属性をそこに見いだすことは困難である。また、一方で石器集積を「社会的余剰を示す交易品」[58]として捉える見解も多見されるが、その製作を含めた分配や交換は決して時間的、或は物質的な余剰を意味しておらず、当然のことながら経済的、社会的余剰とは別次元に在るものと理解すべきであろう。あくまで、こうした集積という行為、現象は当時の集団内での分配と他集団との交換という石器供給システムの一つの顕在的な適応形態の一つなのである。先にも触れたが、石器群の集積行為はその後の使用を前提としたもので、大半が積み重なった状態での出土が確認されていることから、小ピットを掘りその中に石器を纏めて置いていたものと想定される。出土石器が悠久な時を経ても尚、積み重なったまま出土する原因は、これらの石器が樹皮や獣皮などによって包まれていたこと、そして小ピットへの収納に際しては掘り出した土を埋め戻して石器を覆うという行為も考えられよう。また再度、取り出す時に備えてそこに何等かの目印が置かれていたのであろうか。

ところで3章に於いて詳しく論及したように、集積に伴う石器群は相互に使用石材、製作技術、形態等で強い斉一性を有するものであった。ここで指摘しておきたいのは、そうした集積された石器に認められる斉一性は搬入品か否かを問わず、つまり分配された石器か交換された石器かを問わず共通している見いだされている点である。これは石器の斉一性というものが分配や交換の際に混在されることなく、むしろ一定の単位として活用されていたことを彷彿とさせている。この斉一性の形成要因として特定の石器製作者（個人）の存在を仮定したが、ならばそうした石器群に見られる斉一性は、製作跡遺跡からの持ち出しや各集団への分配、さらに他集団との石器交換といった時間的経緯を越えて崩されることなく存続したこととなろう[59]。それらがまた、使用を前提とした石器集積である点を考慮すると、集積された石器の単位とは同時に消費或は装備の単位であったと看做すこともできようか。これ等の石器集積のデポは、その周囲に全く遺物を含まない単独の出土資料であると同時に、遺跡立地の多くが沖積地面である低位段丘上や緩斜面上に立地していることから、通常の集落とは離れた場所に形成されていたと考えて間違いないであろう。遺跡占拠地以外で、しかもその後に新たに取り出して消資へと転化する石器群の特質を考え併せれば、集積場所は当時の季節的か或は年次的な移動のいずれかの経路上の地点であったと推定するのが最も妥当であろう。そして、各集団はこのように完成された石器を分配、又は交換によって入手しながらもその総てを直ちに消費へと転化させることなく、石材や形態等の斉一性を単位として一定の数量をストックして次なる消費に備えたのである。集積される石器形態が継続的に使用されるものか、或は断続的な

使用のされたものかの断定はできないが、道具をストックし、その消費を計画的に行うという背景には、当時の移動が一定の領域内を巡る循環的な様相を持ち、そうした移動の目的とされた各居住地での生業の形態が先験的に予想されていたことを十分に窺わせているのである。

6　まとめ

本論では縄文時代草創期に特徴的に認められる所謂にデポについて、まず、その資料的集成を行った上でそれぞれのデポ遺跡を構成する石器遺物の石材、技術的特質、形態的類似に注目し、それらがどのような依存状態を示していたものか検討した。その結果、従来デポとして一括されていた



第17図　搬入石材と遺跡での組成（アミ：頁岩、線：黒曜石）

ものは、基本的に二つに区分されるべきものであることが抽出された。一つは特定の器種に拠って構成されているデポで、完形品か未成品によって占められた石器群はその石材、製作技、形態等の諸点に於いて相互に強い斉一性を共有したものであった。この種のデポは完形品か未成品の石器で構成され、殆どが折り重なった状態での出土が確認されている。もう一つのデポは、特定の石器器種を主体としながらも他の器種を伴出したり、または単一の器種構成ながらも石材、技術、形態などの点で系統的に異なるものが、即ち石器群の中に複数の斉一性が認められるデポであった。この種のデポの特徴は欠損品を組成し、実用品とは考え難い石器を伴っている点にもある。ここで仮に前者をデポⅠ類、後者をデポⅡ類としたならば、Ⅰ類は石器集積のデポ、Ⅱ類は石器埋納のデポとして把握することができようか。何故ならばこれまで詳細に論及したようにⅠ類には明らかに使用以前の石器が見られるのに対して、Ⅱ類では使用以後や意識的に欠損した可能性のたかい石器がむしろ主体的に伴出しているからである。前者については縄文時代草創期の石器供給システムの化石化した状態、即ち当時の集団内での石器分配や集団間での交換を示す具体的資料として捉えた。この点については石器製作遺跡と分配後に於ける石器整形の遺跡と双方の分析を経て、化石化した静止状態を示すデポの動的システム内への位置付けを通して石器供給システムの再構築を試みたところである。一方、後者に対しては分析と位置付けに耐え得る資料的限界が明らかな為、踏み込んだ論及や解釈は控えざるを得なかった。いずれにせよそれらが欠損品を主体に完形品までをも含み、しかも系統的に相違した石器群によって構成されていることは、そこから取り出し再度使用することを目的としていたとは考えられず、また、当然のことながら単なる遺物の廃棄とも捉え難い。鳴鹿山鹿遺跡に見たようにそうした石器群を覆い、あたかも蓋をするように長大な石斧を設置している状態は、現在のところ儀礼的な要因以外にその背景を説明する手段がない。ただし、そこに一つの解釈を挟む余地があるとすれば、それは石器の分配や交換に際しての何等かの願望、つまり当時の石器生産・供給システムに関連した一種の儀礼的行為であった可能性がたかいという点である。

旧石器時代の石器群は、移動に際して常に携帯した石核から剥片を剥離し、その剥片を素材として刃潰し加工や調整加工を施してナイフ形石器、掻器、削器、彫器などといった多剥片石器を生産していた。石器の生産（製作）は常にその消費と一体的におこなわれ、欠損分や不足分を補充するといった装備的色彩の強いもので、移動を一つの単位として両者のバランスは保たれていた。旧石器時代の石器の基本は剥片石器であり、各種の石器形態は石核を剥離することに拠って得られた剥片を共通素材としていた。即ち、分離・弁別された技術体系に属する剥片剥離技術と調整加工技術の内、石器群の形態的差異に拘わりなく技術基盤としての剥片剥離技術が統一・共有されていたことを最大の特質とする。この為、石核とは特定石器を生み出す限定的価値を持つのではなく、複数石器、当時使用した石器組成の大半を生み出す総体的価値をその内に有していたのであった。故に石核の入手は生活資材の入手を意味し、石核の確保は石器組成の確保を意味し、そして石核の携帯は石器装備の携帯をも意味したのである。ところが縄文時代草創期の神子柴文化に至って、石器組成の主体は石斧、石槍へと変化した。いずれも素材形状の整形によってその形態が作出される石器ではなく、素材形状の大幅な変革を特徴とした石器形態である。石器器種の差を越えた技術基盤の共有などあり得ず、また素材変革の大幅な修正を旨とする石器を製作する為にその素材を携帯する

ことは、整形に伴う変革分までをも持ち歩くことを意味している。石槍などの場合、単一個体から十点以上の量産が可能なナイフ形石器などと相違し、通常約一点、分割個体の場合でさえせいぜい二点に留まることを知る。こうした背景を認めてこそ、それらの石器を原産地地域で集中的に量産し、その結果に得られた大量の石器を集団毎に分配する生産・供給システムを始めて実態視し得るであろう。更にそうした石器の量産が集団内への分配をのみ目的としたのではなく、異系統の石器入手をも射程に入れた交換用の石器も含む点、特に重視しなければならない。そうした石器という考古学的遺物の分配、交換という縦横にわたる供給システムが、一方では集団間の交渉的な社会的システムの一側面を端的に表象していることが理解されようか。そして現在、こうした諸点をもって著者は旧石器時代と縄文時代の画期と捉えたいと考えているのである。

デポと呼称される遺跡とそこからの出土石器について、以前から興味を抱いていたが、その後、検討する機会と分析視点とを持たなかった為に今日に至ってしまった。その間に資料や知識の集積を心がけていたならば、このテーマに対して長い思考の埋納期間を置くことなく、しかも分析方法や論理構成などの点でより整ったかたちのレポートを上梓することができたかも知れない。

特にデポ遺跡とその集積・埋納行為の時間的な幅については、今回触れることが適わなかった。同一形態の石器を保有し、その組成に関しても基本的に変化することのない文化系統の中で、デポ行為の系譜をより過程的に解析して行く心要があろう。言うまでもなくその為には石器群の型式学的分析、組成検討をより一層推し進め時間的変遷の過程を明確にするのと同時に、石器群の系統を空間的に追及することも不可欠となろう。デポ出土石器の石材、製作技術、形態等の斉一性を一つの手掛かりにその成因を探り、更に製作跡などの一般的遺跡との対比を試みて神子柴文化期遺跡の相互関連の問題に切り込んだのもそうした認識からのケース・スタディとして理解戴きたい。前半部分にデポの区分とその認識と、後半部の遺跡対比を通じての該期石器供給システムへの位置付けがやや個別的に過ぎた嫌いがあったかも知れないが、その点は改めて論及する機会が在ろうかと考える。御寛如願いたい。本稿の執筆にあたり次の方々から御指導、御助言を賜った。麻生　優、麻生敏隆、会田容弘、明石　博、岡本東三、奥　義次、大竹憲昭、大野憲治、奥村吉信、佐藤宏之、白石浩之、田中英司、寺崎康史、堤　隆、中村由克、松井政信、宮崎　博。本稿が縄文時代草創期神子柴文化研究に少しでも益する部分があったとしたならばそれは上記した諸先生、諸先輩の賜物である。最後に、故高橋　敦氏には学生時代以来、草創期についての議論の相手となって戴き実に多くのことを学んだ。氏の御霊前に本稿を捧げ、その御恩に報いたいと思います。

(1990.2.15稿了)

(註)

1)　大野延太郎 (1904)「大いなる石鉾と精巧なる石鏃」『東京人類学雑誌』第140号

沼　弘・増田進治 (1968)「福井県鳴鹿山鹿遺跡出土の旧石器」『考古福井』1　なを、土肥孝氏は大野報告の「石ノ原料タリシ石片二箇ノ上ニ大ナル石斧ヲ横タヘソノ下ヨリ三十余ノ石鏃モ出テタリシト

伝フ」という記述を基にその出土状態の復元を敢行されている。

土肥孝（1989）「第一の道具」『縄文人の道具』古代史復元3

2） 八幡一郎（1938）「原始文化の遺物」『日本文化史体系』1

3） 林　茂樹（1960）「長野県上伊那郡南箕輪村神子柴遺跡出土の丸のみ形石斧について」『信濃』第12巻第6号

林　茂樹・藤沢宗平（1961）「神子柴遺跡――第一次発掘調査――」『古代学』9-3

林　茂樹（1966）「旧石器時代」『上伊那の考古学的調査』

4） 大宮市遺跡調査会（1986）『西大宮バイパスNo.4遺跡』

5）福炭市教育委員会（1988）『仙台内前遺跡』

6） 犬飼町教育委員会（1988）『市ノ久保遺跡』

市ノ久保遺跡では神子柴型石斧と船野型細石核とが検出されているが、その共伴関係の追及は今後の該期西南日本の様相を語る場合、非常に重要なものとなってくるであろう。船野型の型式変遷を見極めたうえで、その位置付けを確定できたならば神子柴文化との接点を明らかに得ようし、それと所謂福井型の細石核との関係を分析することにより、隆起線文土器文化と神子柴文化との編年的な関係も抽出されてこよう。

7） 山内清男（1969）「縄文草創期の諸問題」『ムューゼアム』第224号

山内清男・佐藤達夫（1969）「縄文土器の古さ」『科学読売』12巻13号

佐藤達夫（1974）「黎明期の日本」『図説　日本の歴史』小学館

8） 注3）文献。

稲田孝司（1977）「旧石器時代の小集団について」『考古学研究』94

9） 芹沢長介（1960）『石器時代の日本』築地書館

10） 本論ではデポ遺跡とそれを構成する石器遺物の基礎的検討から論を展開するが、それらを一括するのではなく総括する意味でデポという呼称をもって把握しておきたい。こうした背景には既にこの用語が慣用的表現以上に学史的な意義を有するものであると考えるからである。

11） 特に安斉正人氏の一連の研究から多くの示唆を与えられたことを付記しておきたい。著者も資料分析から得られた結果を解釈し、更にまた資料へとフィードバックして仮説を提出するという螺線的な止揚の軌跡に学問的な意味を求める立場にある。本論と併せて下記論文を熟読願いたい。

安斉正人（1986～87）「先史学の方法と理論　―渡辺仁著『ヒトはなぜ立ちあがったか』を読む(1)～(4)―」『旧石器考古学』32～35

12） 岡本東三（1979）「神子柴・長者久保文化について」『研究論集Ⅴ』奈良国立文化財研究所

13） 唐沢B遺跡については正式報告がなされていないがこれまでの文献で概略は知り得る。石器集積の欠如と複数系統石器の組成、貯蔵穴、台石、砥石、顔料の存在などはその生活跡としての色彩を強く留めている証拠と言えよう。唐沢B遺跡の資料実見の際しては森嶋稔氏に配慮戴き、いろいろ御教示を載いた。

森嶋　稔（1970）『菅平の古代文化』

森嶋　稔（1982）「唐沢B遺跡」『長野県史　考古資料編　第1巻(2)』

14)　栗島義明（1988）「神子柴文化をめぐる諸問題」『研究紀要』第4号

15)　明石博志他（1983）『陸別遺跡』

石器群の出土状態について明石博志氏に御教示戴き、道央部の石質については米村衛氏に助言戴いた。

16)　註2）、12）文献

17（　鈴木孝志（1968）「北上川中流域の無土器文化」『北上市史』第1巻

鈴木孝志・鎌田俊昭（1971）「北上川中流域の石器」『遺光器』5号

遺跡は沖積地に存在し、部分的に礫層が露呈している。持川遺跡もこうした礫層を掘り込んだ遺構の存在が想定される。

18)　註4）文献。大宮市立博物館の笹森紀実子氏より観察の機会を戴き、また報告者の田代治氏の御厚志によって観察所見を含めた図の掲載の許可を戴いた。

19)　永峯光一・神田五六（1958）「奥信濃・横倉遺跡」『石器時代』5

永峯光一（1982）「横倉遺跡」『長野県史　考古資料編　第1巻(2)』

20)　白石浩之（1989）『旧石器時代の石槍』　ＵＰ考古学選書

21)　森嶋　稔（1968）「神子柴遺跡石斧をめぐっての試論」『信濃』22-16

22)　下村　修（1974）「長野県駒ヶ根市発見の石器について」『プレリード』19

23)　註1）文献。

24)　松井政信（1980）「福井県鳴鹿山鹿遺跡の石器群」『六呂瀬山古墳群』

松井氏から石器群とその石質についていろいろ御教示を得た。氏によれば石器の出土地点の特定も明治年間の地籍図などからほぼ可能であり、それによれば土肥・岡本報告の局部磨製石斧も同一地点出土の可能性が強いという。

25)　土肥　孝・岡本東三（1979）「福井県鳴鹿山鹿遺跡出土の局太磨製石斧」『考古学雑誌』第65巻第1号

26)　この点に関しては既に註14）文献のなかで触れておいた。参考願いたい。

27)　従来の研究ではこうしたデポの遺物内容（完形／欠損）と遺物構成（石斧・石槍）の基礎的検討と、その関連の追及を怠ったことに最大の欠点がある。

28)　同様な石器型式の下位概念としての単位や斉一性については、著者も既に砂川遺跡の分析を通じて抽出を試み、その成因として特定の石器製作者の存在を想定して集団の構成を把握する方向性を示したところである。

栗島義明（1988）「砂川先土器時代遺跡の構造」『日本考古学協会第52回研究発表要旨』

29)　中村由克（1989）「尖頭器の石材」『シンポジューム　中部高地の尖頭器文化』

30)　御堂島正・上本進二（1988）遺物の地表面移動」『旧石器考古学』37

31)　多摩ニュータウンNo.769遺跡の黒曜石原石の稜も著しく摩滅し、阿部祥人氏は獣皮等での運搬の際に生じたものと評価されている。

32)　岡本東三氏から鳴鹿山鹿遺跡の有茎曽頭器の欠損品の中に側辺部が著しく摩滅したものの含まれていることを指摘戴いた。松井氏の分析中にも同様な観察結果が掲載されている。

33)　東北地方では一般的に硬質頁岩を用いた石斧が凌駕する事実があり、他の地域でもそれに代わる硬質

の石材が用いられている。その点からしても仙台内前遺跡、鳴鹿山鹿遺跡例が特異なことが窺われよう。

34) 両遺跡で共に石斧が一番上に、ちょうど蓋をするが如く設置されていることは石斧が何等かの象徴的意味を帯びた石器であることを示していよう。また、石核の存在も見落とすことができない。石器を製作する際の素材である剥片を生み出す石核も、そうした生産的意味での象徴性を背おったものかも知れない。

35) 林　茂樹（1964）「長野県伊那神子柴遺跡（第2次調査）」『日本考古学年報』12
林　茂樹（1983）「神子柴遺跡」『長野県史　考古資料編　第1巻(3)』

36) 田中英司（1982）「神子柴遺跡におけるデポの認識」『考古学研究』第29巻第3号

37) 稲田孝司（1982）『日本の美術　188』　至文堂

38) 東洋大学中道遺跡発掘調査団（1976）『中道遺跡調査報告書』

39) 三鷹市遺跡調査会（1980）『井の頭池遺跡群A地点発掘調査報告書』

40) 後野遺跡調査団（1976）『後野遺跡』

41) 註13）文献。

42) 飯館村教育委員会（1984）『大板遺跡』

43) 安達町教育委員会（1980）『油王田遺跡』

44)、45) 加藤　稔編（1972）『上屋地遺跡』

46) 註17）文献。

48) 村越　潔（1975）「大森勝山遺跡」『日本の旧石器2　遺跡と遺物（上）』

49) 青森県郷土博物館（1979）『大平山元Ⅰ遺跡調査報告書』

50) 芹沢長介・中山淳子（1965）「新潟県津南町本ノ木遺跡発掘調査略報」『越佐研究』12
山内清男（1960）「縄文土器文化のはじまる頃」『上代文化』30

51) 宮崎　博（1983）「縄文時代草創期の住居跡」『季刊　考古学』第4号

52) 橋口美子（1985）「縄文時代草創期の尖頭器製作について」『東京考古』3

53) 安斉氏も同様に part-time specialists の存在を指摘されている。また、本文の執筆中に渡辺　仁氏の『縄文式階層化社会』（六興出版）を入手した。我々にとっても極めて興味のある見解が語られているが、本文には残念ながら生かすことができなかった。

54) 相沢忠洋（1967）「群馬県赤堀石山遺跡」『考古学ジャーナル』9
相沢忠洋・関矢　晃（1983）「石山遺跡」『群馬県史　資料編1　原始古代1』

55) 戸田哲也（1973）「千葉県南大溜袋遺跡」『考古学ジャーナル』78

56) 白石浩之（1980）「第1文化層」『寺尾遺跡』

57) こうした石器供給システムは旧石器時代の石器、個体（石核）入手と類似はするが基本的に相違した内容と社会的意義を有していたものと考えられる。何故ならば石自体に備わった性質が価値を持ち、あくまで〝モノ〟として動く旧石器時代の遺物に対して、神子柴文化ではそうした地域的に限定された産地を持つ石材を素材に、熟練者の技術駆使という一定の労働力の投下の後に生成された〝製品〟として動いていることを知るのである。為に素材は勿論であるがどのようにして優れた製品を多く製作するか

に中心的な課題が存在したものと考えられる。優れた製品は高いレートを持って他の地域の石器と交換することが可能であったろうし、その一部は儀礼品、或は威信財として更に重要な意味が付与されたであろう。石器製作については技術と労力という二つの面での労働力の投下がおこなわれた。本ノ木遺跡や前田耕地遺跡の割り箸様の石槍は、実は大量に出土した石槍群のなかに占める数量が非常に少ないことを知る。石器製作者がその保有した技術を駆使して作った儀礼品と見る可き石器であろう。それはまた当時の交換や儀式などに於いて欠くことのできない重要な品であったのだろうか。石斧については、そうした製作面に加えて労力の投下が確認される。打製の石斧に研磨を加えて磨製石斧として仕上げるのには、我々が想像する以上の時間と労力が費やされるものである。ニューギニア高地人の磨製石斧の製作では、打製品の完成の後に2～3ヶ月もかかって研磨を行い製品として仕上げているという（下記文献）。神子柴文化期の石斧のなかには硬質頁岩製の磨製石斧も認められている。神子柴遺跡や唐沢B遺跡のなかには刃部のみならずその身部にまで研磨の及んでいる石器が見いだされている。こうした石斧も実用品ではなく、儀礼品としての可能性が強い。

佐原　真（1979）「技術と道具」『図説　日本文化の歴史』小学館

なお、佐原氏のデポの研究史的整理も多くの点で示唆に富む内容のものであったが、本論ではその成果を生かしきれなかった。今後の課題としたい。

佐原　真（1985）「ヨーロッパ先史考古学における埋納の概念」『国立歴史民俗博物館研究報告　第7集』

58)　同種の指摘の多くは佐藤達夫氏の論考を典拠とし、余剰という意味を逆手にとって批判するが、佐藤氏の一連の文章を熟読すると、本論で著者が実証した石器分配とその交換をまで射程に入れていることが理解される。即ち「デポがあるということは、そこに交換用の品物があり、それを運搬した人間がいるということである。それは交換用物資の獲得、製造および交易といったような、日常生活以外の諸活動を支えた社会的余剰の存在を意味している」（註7文献）。

59)　ただし、削器などは石槍や石斧とは違ったかたちで分配や交換のおこなわれた可能性がある。デポを構成する石器と同様な研材に拠りながらも、集積等の依存状態が見られず各遺跡に於いて平均的な保有の認められたことが注意される。今後、頁岩製削器の遺跡での在り方もこうした点から検討する必要があろう。

〔写真出典〕

神子柴遺跡：林　茂樹・藤沢宗平（1961）「神子柴遺跡」『古代学』9－3
林　茂樹（1966）『上伊那の考古学的調査』、佐藤達夫（1974）「黎明期の日本」『図説　日本の歴史』小学館、芹沢長介（1974）『古代史発掘1　最古の狩人たち』講談社、稲田孝司（1988）『旧石器人の生活と集団』講談社、今村啓爾（1987）「狩人の系譜」『山人の生業』中央公論社

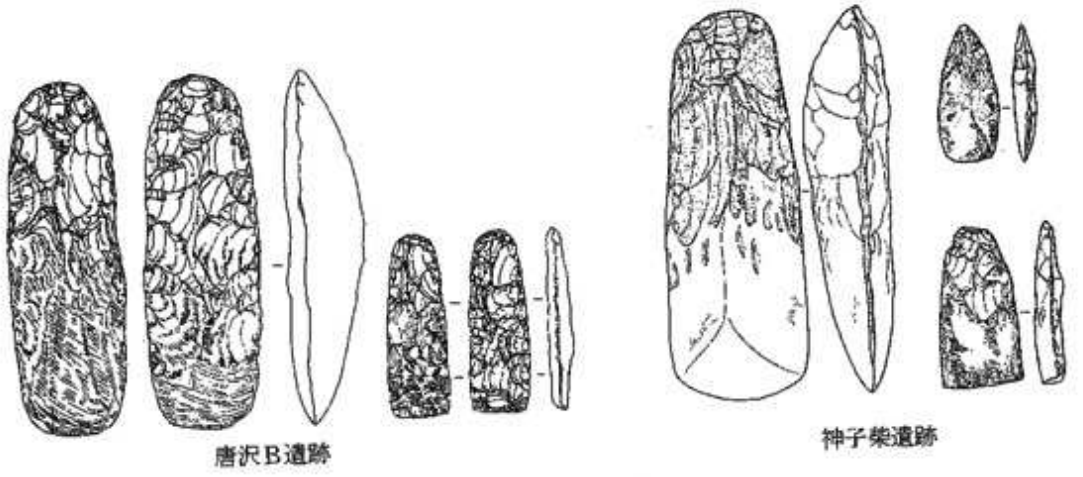
綴子遺跡：八幡一郎（1938）「原始文化の遺物」『日本文化史大系』1

持川遺跡：著者撮影

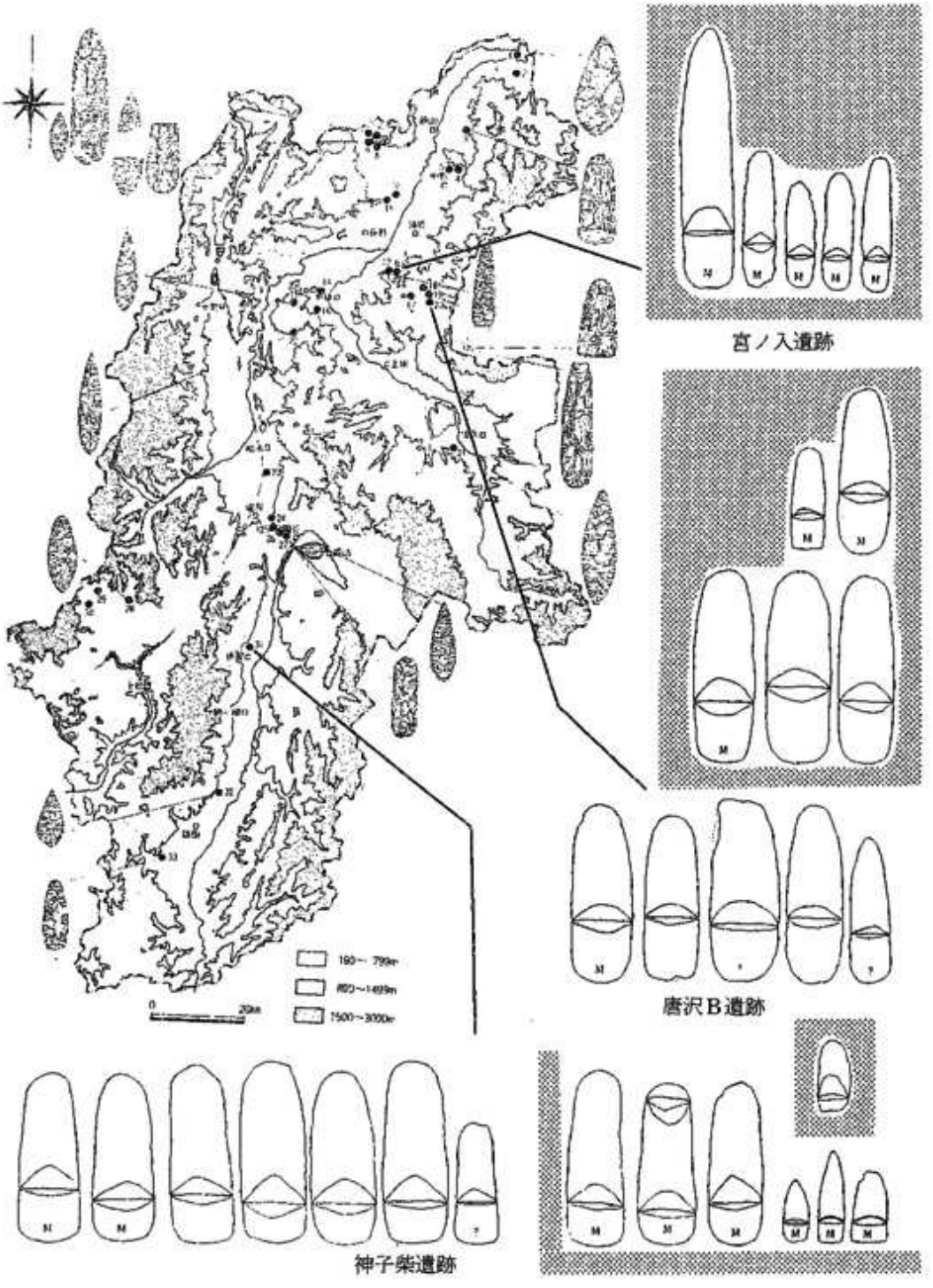
唐沢B遺跡、前田耕地遺跡：埼玉県立博物館（1988）『日本のあけぼの展』図録

原産地から離れるにしたがって交換レートがあがることを示す。原産地間の距離は約600kmである。北部の槍の原産地域では1点の斧と12点の槍が、一方、南部の斧の原産地に接する地域では1点の槍と5点の斧がそれぞれ等価として交換される。

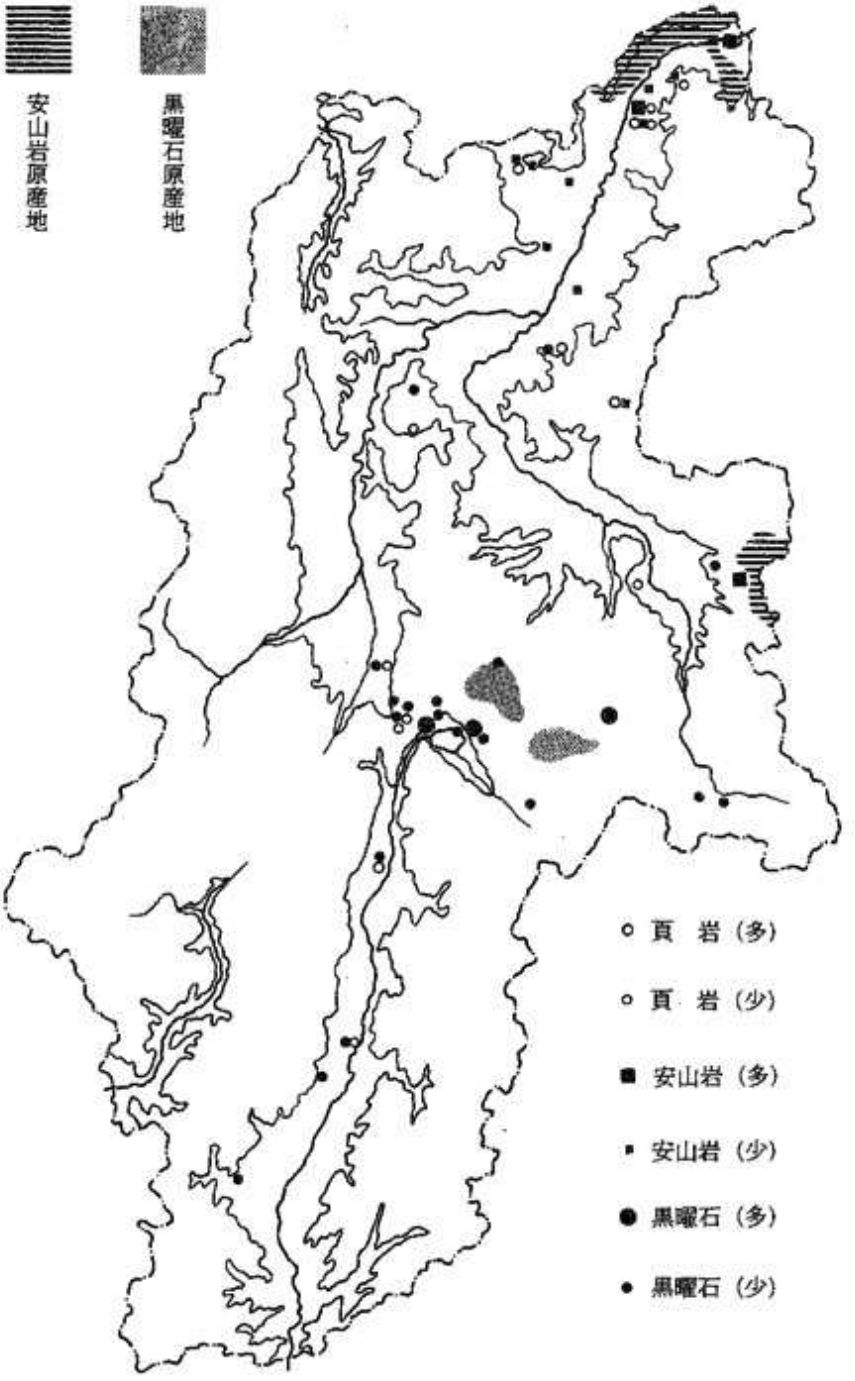
第18図　アボリジニの石器交換とそのレート
(Sahlins,M. 1984『石器時代の経済学』より作図)



第19図　石斧研磨状態



第20図　石斧石材構成（スクリーントーンは搬入石器）

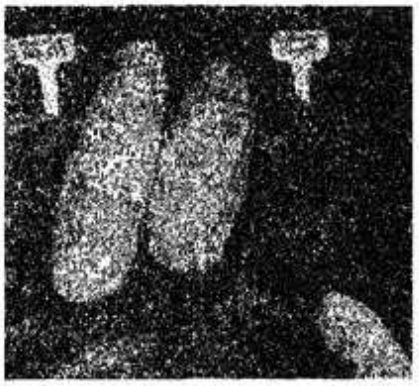


第21図　神子柴文化期遺跡における石器石材構成（長野県）

原産地では製作跡的な遺跡が存在し、その周辺には搬入品と考えられる石器がまとまって出土する。そうしたなかにも異系統石材により石器が組成している。

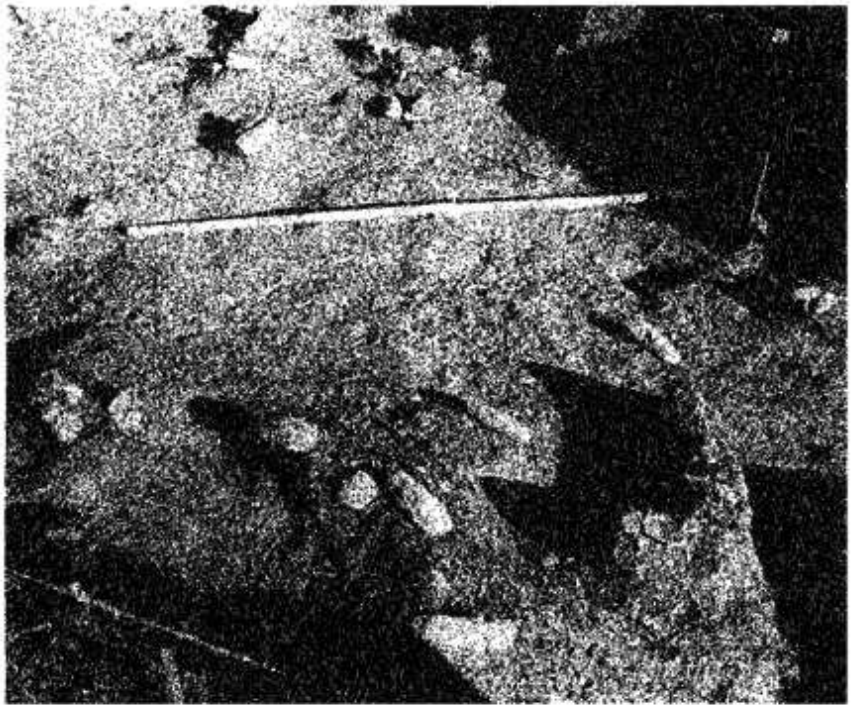
長野北部、東部には安山岩産地、中央部には黒曜石産地が存在する。これらに頁岩を加えた三者が遺跡を単位に遍在している。交換のルートとその単位的地域の姿が本図からも或る程度うかがわれる。

第23図　ニューギニア高地人の磨製石斧の製作
（2・3ヵ月を費して石斧を製作する）
（National Geographic, Vol. 103, No4, 1953）



石斧の集積状態（日向洞窟遺跡・西地区）
（製作跡からの持ち出しに際しての集積と考えられる）

石槍の集積状態（神子柴遺跡）

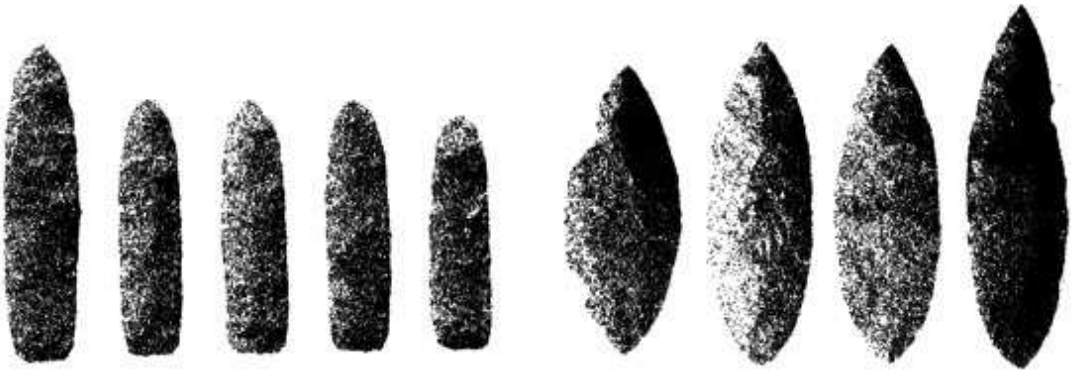


石器出土状態（神子柴遺跡）

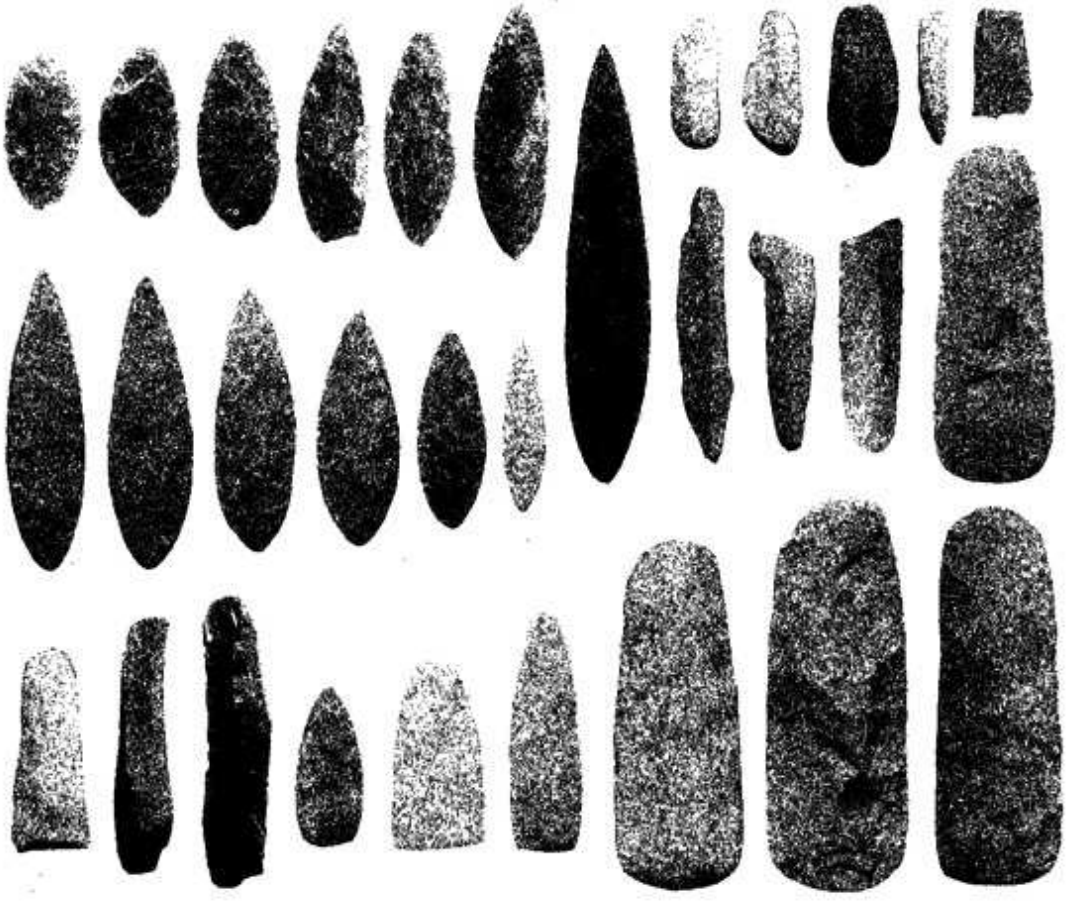
神子柴遺跡遠景

神子柴遺跡近景

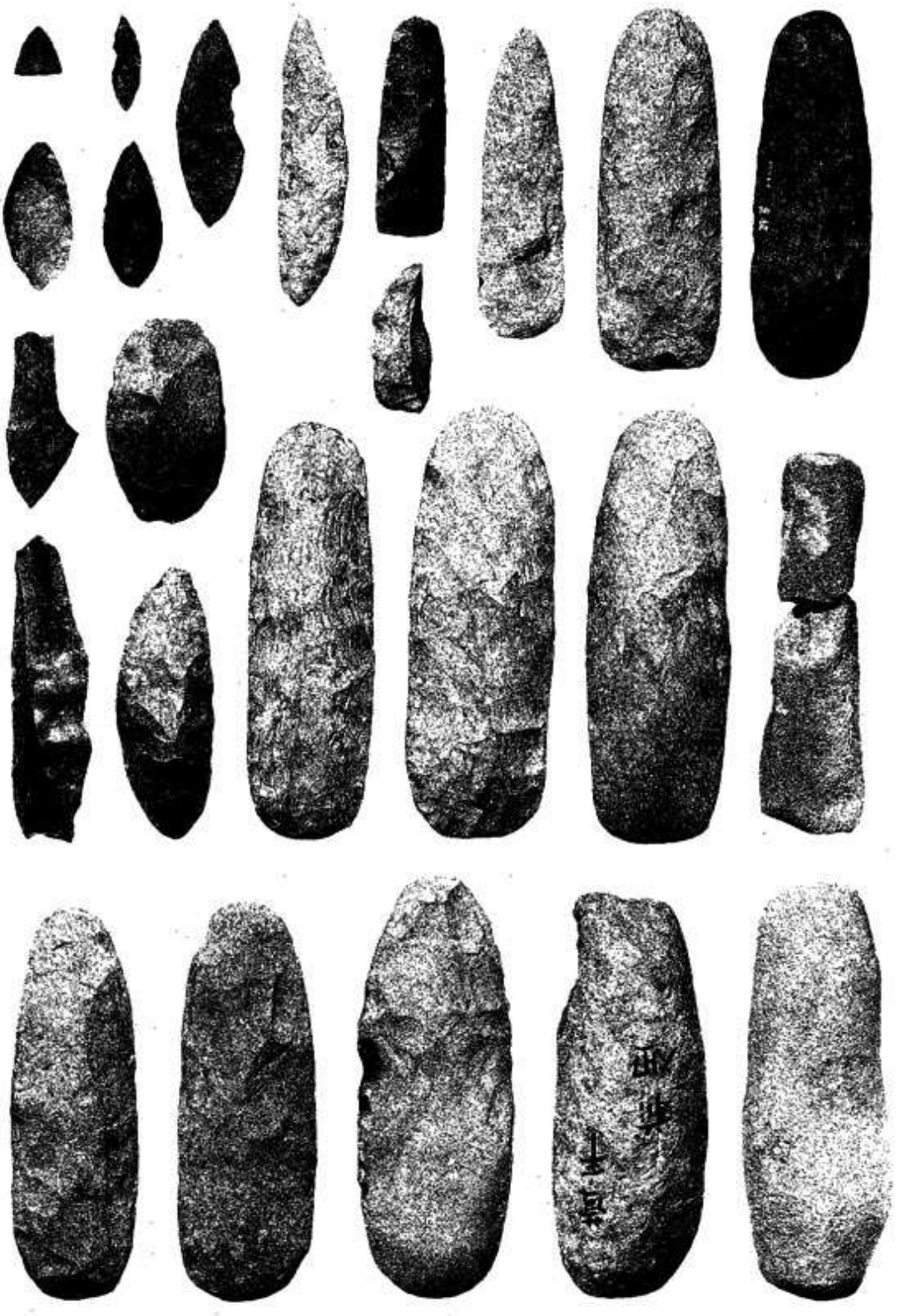
図版 2



持川遺跡　　緑子遺跡

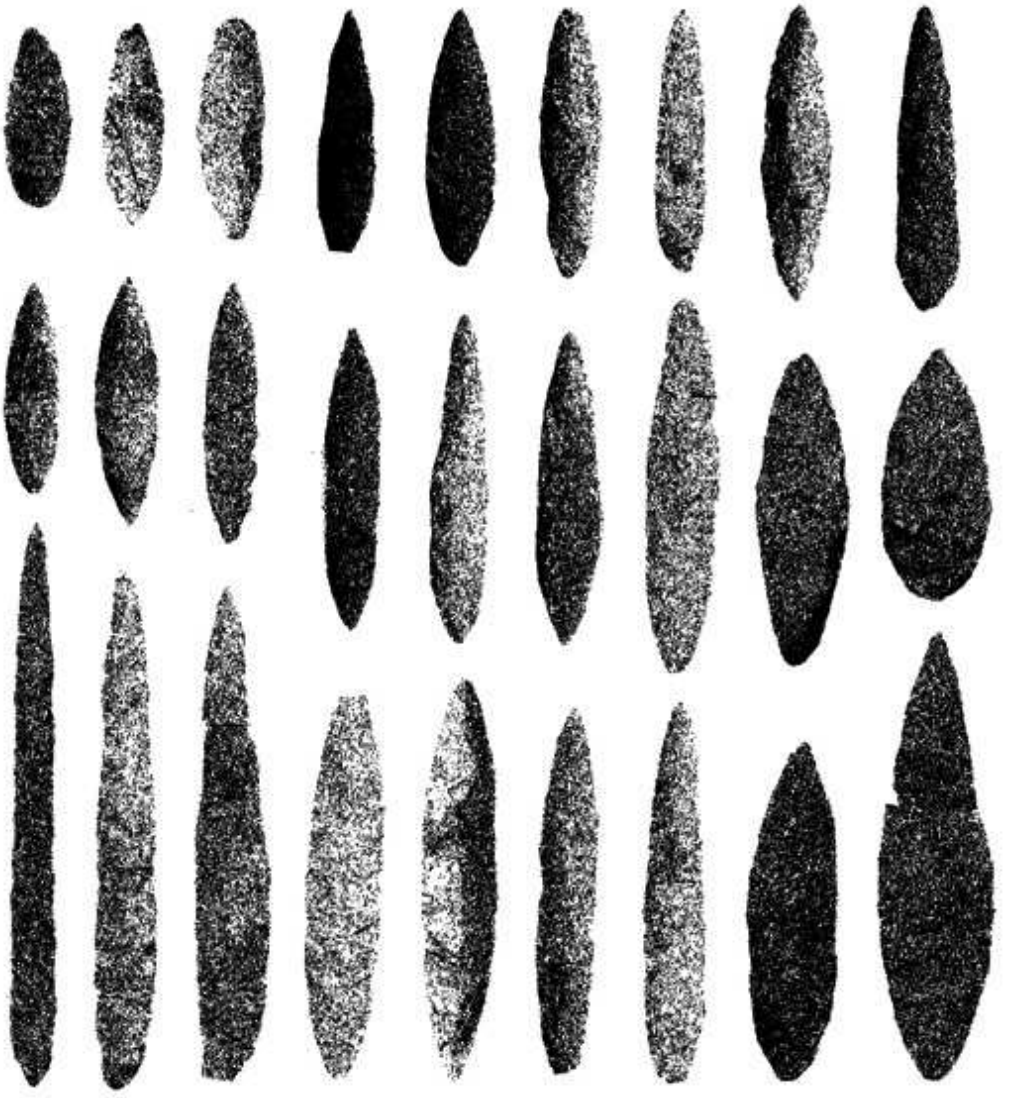


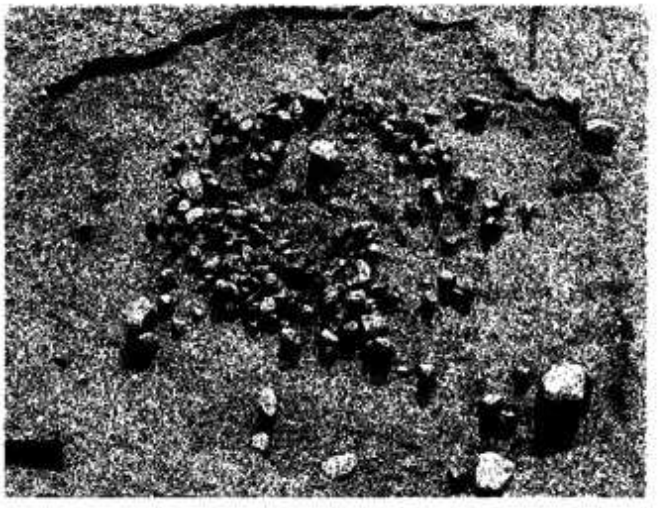
神子柴遺跡



唐沢B遺跡出土石器

図版 4





前田耕地遺跡の石槍・住居跡

研究紀要　第7号

1990

平成2年3月25日　印　刷

平成2年3月31日　発　行

発　行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01　大里郡大里村大字箕輪字船木884

☎0493—39—3955

印　刷　望月印刷株式会社